

後期イギリス・クエーカー派研究序説

——クエーカー企業者史研究のための覚え書き——（下の二）

山
本
通

目 次

- 一 はじめに——問題の限定
- 二 イギリス・クエーカー史の四つの時期
 - A 初期クエーカー〔以上『商経論叢』十九卷一号〕
 - B 静寂主義の時期
 - C 福音主義の時期〔以上『商経論叢』十九卷二号〕
 - D 自由主義の時期〔以下本号〕
- 三 イギリス・クエーカー社会史の諸問題
 - A 人口動態と人口移動
 - B 社会層構成〔以上本号〕
 - C リーダーシップ
- 四 イギリス・クエーカー史と企業者史研究——研究の展望

D 自由主義の時期

E・イシチェイによれば、一八七〇年代にクエイカー派の中で自由主義神学が形成され、それが一八九〇年代にクエイカー派の主流を占めるようになった背景には、十九世紀後半における諸科学の進展という事態がある。特に、ダーウィンの進化論と歴史研究による聖書批判の進展は、福音主義神学の土台をなす聖書主義を打ち壊してしまつた。⁽¹⁾クエイカーにかぎらず当時の知識人キリスト教徒は、めざましい諸科学の進展の成果をいかにしてキリスト教信仰と矛盾なく結びつけようか、と苦慮したはずである。そしてその解答は多様であり得たであらう。

クエイカー派は最終的には一八九五年のマンチェスター会議において自由主義神学の立場を確立したのであるが、キリスト教史において自由主義神学の代表者と考えられているのは、ドイツの神学者アルブレヒト・リッチュル（一八二一—一八九年）とリッチュル学派の人々であり、⁽²⁾リッチュル学派の特徴としては、ふつう①神学からのドグマ的形而上学の排除、②宗教の経験的・実践的性格の重視、③キリストにおける歴史的啓示の強調、④神の国の觀念の強調などがあげられる。これらのうち①③はクエイカー派自由主義神学のきわだった特徴でもあるのだが、イシチェイによれば、クエイカー派内部での自由主義神学の興隆に直接の影響を与えたのは、リッチュル学派の人々の著作ではなくて、むしろ当時のイギリス国教会の自由主義神学者たち——E・ケアード（一八三五—一九〇八年）、T・アースキン（一七八八—一八七〇年）、J・M・キャンベル（一八〇〇—七二年）、F・W・ロバートソン（一八一六—五三年）等——の諸著作であつた。

クエイカー派内部で自由主義神学の立場をはじめて鮮明に打ち出した著作は、匿名氏による『合理的信仰』⁽⁴⁾（一八八四年）であつた。『合理的信仰』の著者は、「キリスト教を神学の体系としてではなく、一つの生き方として解釈するこ

とを提唱し、ドグマに代えて体験的宗教を置くことを提唱する⁽⁵⁾。そして、『合理的信仰』における神学の基調は「漸進的な啓示」(Progressive revelation)という一句に凝縮されていた。すなわち神は、その御言葉を一つの堅固な静止的な形態で固定されるのではなくて、人類が成長するにしたがって漸進的に真理を顕らかにされる、というのである。そして聖書は、そのような漸進的な啓示の過程における一つの記録にすぎないものだ⁽⁶⁾とされる。このような聖書観は、聖書のドグマ的な理解が行われる根拠を取り除くとともに、キリスト教理解を健全な理性や常識と調和させ、諸科学の発展にともなう人類の文化的発展を信仰と矛盾しないもの⁽⁷⁾と考えることを可能にさせた。だが、聖書が信仰の絶対的根拠たり得ないならば、一体何が信仰の根拠たり得るのだろうか。『合理的信仰』の著者は、それを人間の内的な体験に求める。すなわち、信仰は宗教的体験という直接的な証拠——人々の心の中での神の本当の顕現——に依拠するのだから、信仰の基礎は永遠に確かだ、⁽⁷⁾というのである。こうして、今やあの「内なる光」が再度クエイカー神学の中核にすえられることになった。ただし注意すべきなのは、クエイカー派自由主義神学における「内なる光」の概念と十八世紀クエイカー派静寂主義神学のそれとが根本的に異なっている、という点である。すなわち本章B節において述べたように、静寂主義神学においては「内なる光」は人間的な自然の理性や良心と矛盾すると考えられたのに反して、クエイカー自由主義神学においては「内なる光」はそれらと矛盾するはずがない、と考えられたのである⁽⁸⁾。

『合理的信仰』の福音主義批判は、すぐにクエイカー派内部で大きな反響を呼び、クエイカー派の雑誌 *The (London) Friend* および *The British Friend* 誌上で数年にわたって、福音主義者と自由主義者のあいだで論争が展開された⁽⁹⁾。だが論争は、新しい知的情况を踏まえた自由主義者の方に分があった。特に *The British Friend* 誌の編集者は、一貫して自由主義者の立場を擁護した。そして、『合理的信仰』出版の二年後にはE・ワーズデル著『神の助力の福音』⁽¹⁰⁾が出版されて、自由主義神学の立場が補強された。

『神の助力の福音』における議論は『合理的信仰』に関して指摘してきた諸論点をほとんど全部踏まえていると思われるが、前者において更に自由主義神学の二つの特徴が明らかになる。一つは、きわめて樂觀的な人間観である。ワーズデルは普遍救済論を唱え、人が地上で本当の義人になり得る可能性を信じた。⁽¹¹⁾このような樂觀的な人間観は、クエイカー神秘主義やクエイカー福音主義における悲観的な人間観とは対照的である。イシチェイによれば、自由主義クエイカーたちは原罪の教義を否定する傾向にあり、のちに、ある自由主義クエイカーは「心の内なる神の種子というクエイカーの教義は、原罪の教義と完全に矛盾する」とさえ述べている。⁽¹²⁾

自由主義クエイカーはこのように原罪の教義を否定するのだから、彼等は当然、キリストの贖罪をも否定する。むしろ、キリストの地上での生涯の目的は聖なる生涯の模範を人類に示すことに在り、キリストの死は自己犠牲の模範を人類に対して示すことにあった、とワーズデル等は考えるのである。⁽¹³⁾

『合理的信仰』および『神の助力の福音』において唱えられた、以上のような内容を持つ自由主義神学は、エドワード・グラップ⁽¹⁴⁾やトマス・ホジキン等の若手の指導者の台頭をともないつつ、急速に、しかも完璧にクエイカー派の中に浸透した。一八九五年のマンチエスター会議の開催は、自由主義神学がクエイカー派の正統派 (Orthodoxy) になったことを示す画期的な事件であり、⁽¹⁵⁾この会議において、クエイカー派の最大の指導者としてのジョン・ウィルヘルム・ラウントリ⁽¹⁶⁾（一八六八—一九〇五）の精力的な活動が開始されるのである。

一八八五年に、クエイカー派の国内伝道委員会は「フレンズ協会の原則と実践に関する……無知を払拭し、伝道事業への若いメンバーの加入を強化するために、努力がはらわれるべきである」と結論し、「これらの問題を更に議論するための特別会議の任命」を同年のロンドン年会に提案した。年会はこの提案を受諾し、国内伝道委員会に特別会議開催の準備を要請した。この決定を知って、ランカシア・チェンバースはこの特別会議をマンチエスターに誘致し

た。特別会議は11月10日から15日まで六日間にあつて開催され、その議事録の要約はイギリス全土の有力新聞に掲載された。会議への参加者は千名から千三百名と言われる。——これがマンチェスター会議の概要である。⁽¹⁷⁾

マンチェスター会議はシンポジウム形式で進められた。すなわち、あらかじめ七つのテーマが設定され、各々のテーマについて数名の報告者の報告が行われ、それらを踏まえて参加者を含めた討論が行われているのである。設定された七つのテーマとは、①「初期クエイカリズム——その精神と力」②「クエイカリズムは現代世界に対してメッセージを持っているか」③「成人学校と伝道集会の関係、およびフレンズ協会の組織」④「社会問題に対するフレンズ協会の態度」⑤「現代思想に対するフレンズ協会の態度」⑥「霊的な真理のより有効な提示」⑦「我が礼拝集会の活性化」である。⁽¹⁸⁾ 最終日には「世界に対するキリスト教のメッセージ」と題して、T・ホジキン以下四名の講師が講演を行っているが、以上の七つのテーマの題目の設定の仕方自体がきわめて自由主義的な色彩を持っている。そしてイシチェイによれば、これらの報告者の大部分が自由主義神学の立場に立つ人々であった。⁽¹⁹⁾

マンチェスター会議の中でとりあげられた諸問題の中味の検討については別の機会に譲りたいと思うが、ジョウンズはマンチェスター会議の意義を次のように表現している——「現代の論争点が真向うから取り扱われ、「フレンズ」協会は、事実、前進することを決定した。それ「フレンズ協会」は、科学的、歴史的な研究の健全な結論を喜んで受け容れ、その霊的なメッセージをすみやかに明確化し、その社会的伝道を、周囲の進歩的思想と生き生きと調和させながら、すみやかに遂行する姿勢を示したのである」と。⁽²⁰⁾ マンチェスター会議は、まさに、イギリス・クエイカー派の新しい時代の幕明けを示す画期的事件であったのである。

マンチェスター会議においてクエイカー派の正統派になった自由主義神学は、その後もクエイカー神学の正統派でありつづけている。周知のように一九三〇年以後、カール・バルト（一八八六—一九六九年）やラインホルト・ニーバ

ー（一八九二―一九七二年）の聖書的・宗教改革的神学の復興が行われ、彼等の神学は全キリスト教会に大きな影響を与えたのだが、クエイカー派は彼等の影響を受けることがまったくなかった。完全な超越的存在としての彼等の神の理解が、クエイカーの「内なる光」の概念と全然相容れないからであった。⁽²¹⁾

自由主義神学が、クエイカー派の正統説になったためにクエイカリズムに起った変化としては、第一に、宗教の知的な研究が開始されたことが挙げられる。クエイカー歴史家たちの関心は、みずからの宗派の歴史、特に初期クエイカー史に集まった。一九〇三年には、フレンズ歴史協会 (Friends Historical Society) が設立された。また、ジョン・ウィルヘルム・ラウントリとルーファス・ジョウンス（一八六三―一九四八年）によって英米のクエイカーについての通史の執筆が企画され、前者の死（一九〇五年）後ジョウンスとW・C・ブレイスウェイトによって執筆・刊行された、いわゆる「ラウントリ・シリーズ」の諸著作は、現在でも標準的な通史としての価値を失っていない。⁽²²⁾

クエイカー派に起った第二の変化は、成人教育が組織的に推進されるようになったことである。クエイカー信徒たちを現代の情況について無知にさせないために、一八九七年にはじめてヨークシアのスカーパーで成人のための夏季学校が開設され、宗教教育と社会問題に関する教育が施されたが、この種の夏期学校はまもなくイギリスの各地で開校されるようになった。そして一九〇三年には、バーミンガム郊外に永続的な成人教育のための機関として、ウッドブルック・カレッジが創立された。⁽²³⁾

第三の変化は、クエイカー派が教団として社会問題と組織的に取り組むようになったことである。もちろん、初期および福音主義の時期におけるクエイカーたちの社会問題への関心はかなり強く、クエイカー派は多くの社会運動家を生み出してきた。しかしながら、彼等の活動は個々人の、あるいは有志グループの活動であって、教団が組織的に社会問題を取り上げることは、それまでになかったのである。

自由主義の時期においても、教会組織に関する幾つかの変化が見られたけれども、それらのうちの一部は、宗教思想上の変化を明らかに反映している。

第一に、一九二四年に、牧会者を教会業務集会の文書に記録するという慣行が廃止された。それは、自由主義神学の影響によって、一定の見識のある人なら誰でも牧会者たり得るという考え方が定着し、一定期間だけ牧会の仕事を引きうける人が増え、牧会者の公式記録の慣行が無意味になったからである。⁽²⁴⁾ 実際、十九世紀後半以降においては、教会業務集会における発言は「神からの直接の靈感」を受けて行われることは要求されなくなり、常識で充分、とされるようになっていた。⁽²⁵⁾

この変化と関連して第二に、一九〇六年に、牧会と監督の問題の検討がロンドン年会とその下部の諸教会業務集会の手に移された。前述したように、静寂主義の時期、具体的には一七三二年と一七二七年のロンドン年会の決定によって牧会職と長老職は制度的に確立され、⁽²⁶⁾ 更に、一七五四年に牧会者・長老年会が設定されると、牧会者や長老たちの集会はロンドン年会を頂点とする教会業務諸集会のハイアラキーとは別個のハイアラキーに所属することになった。静寂主義の時期において長老の発言力が非常に強くなったのは、そのためであった。しかし、福音主義の時期の終りの頃の一八七六年には、牧会者・長老年会を頂点とする牧会集会のハイアラキーが廃絶されて、代わりに牧会・監督諸集会が設立された。一九〇六年のロンドン年会の決定は、この牧会・監督諸集会 (M. & O. Meetings) の組織体系を廃して、季会および月会に牧会と監督の責任を負わせるものだったのである。⁽²⁷⁾ この決定も、第一の recording ministers の慣行の廃止と同じく、指導者層の固定化を防止するという効果を持った。

第三の変化は、前述した『忠告の質問』の主旨の変化であって、⁽²⁸⁾ 一九二八年に行われた抜本的な改訂においては、福音主義的な言葉遣いが廃止されるとともに、クェイカー教徒の社会的責任が強調されることとなった。⁽²⁹⁾

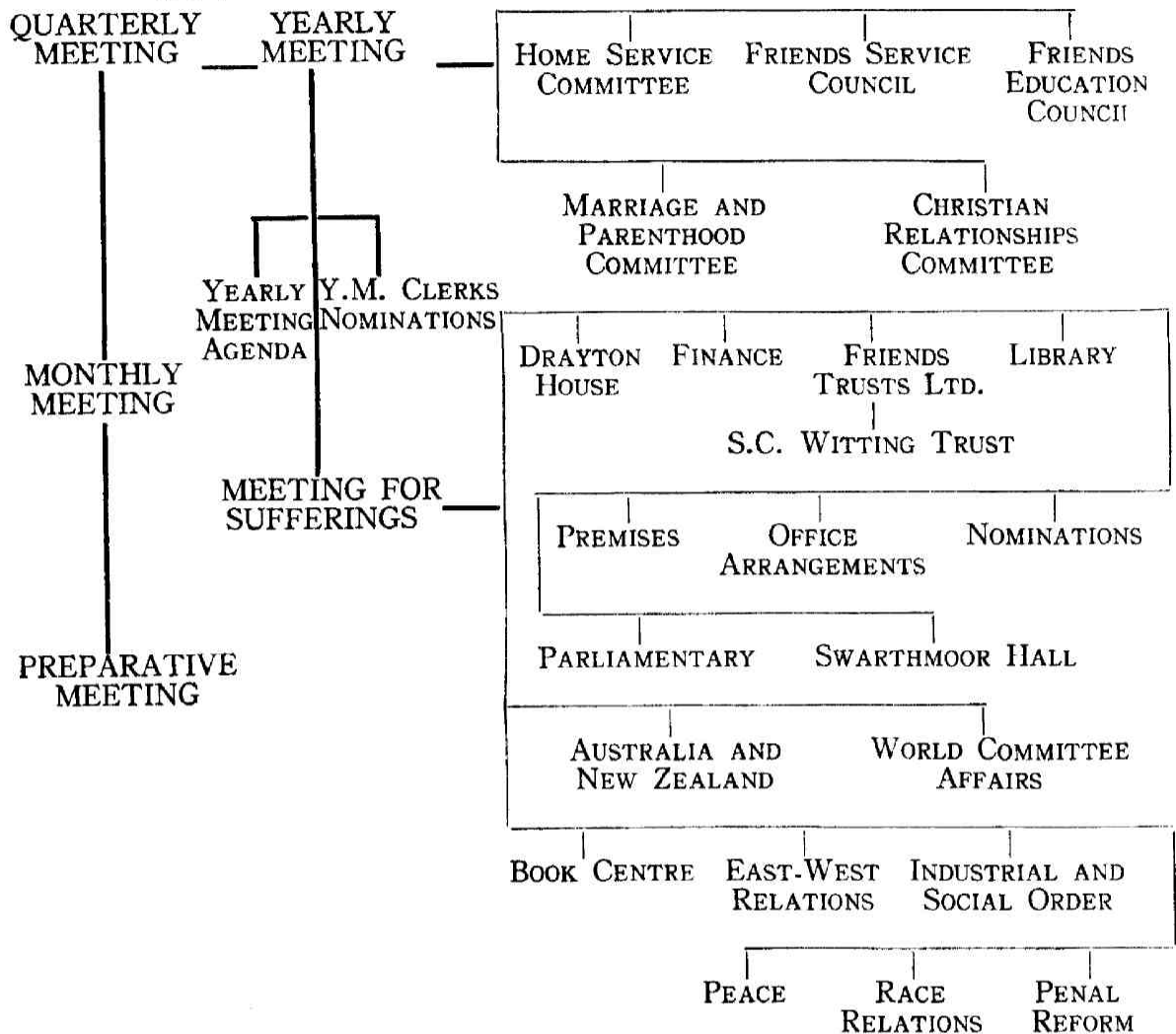
ク ェ イ カ ー 史 年 表

イ ギ リ ス		そ の 他
政 治 ・ 宗 教	社 会 ・ 経 済	
1660 王政復古 ↑ クラレンダン法典による 非国教徒に対する弾圧 ↓		
1685 ジェイムズ 2 世即位		
1688 名誉革命		
1689 信教寛容令 ↑ 理神論盛ん ↓	1720 南海泡沫事件	
1739 メソディスト運動の開始		
1744 カルヴァン主義メソディ ストの分離 ↑ スコットランド啓蒙主義 ↓ 国教会福音主義盛ん ↓	1769 アークライト水力紡績機 1779 クロンプトン、ミュール 紡績機 1783 コート、パドル法 ↓ 産業革命の進行	1756 7 年戦争 ～67 1776 アメリカ独立戦争 ～81
1828 審査律の廃止	1825 1825 年恐慌	1797 ナポレオン戦争 ～ 1815
1833 オックスフォード運動の ～45 開始	1833 工場法	
1844 Y.M.C.A 設立	1834 新救貧法	
1846 福音主義連盟の成立	1839 チャーティスト運動 ～48	1848 マルクス『共産党宣言』
1846 キリスト教社会主義起る	1846 穀物法撤廃 1857 ベッセマー転炉法 ヴィクトリア繁栄期 ↑	1859 ダーウィン『種の起源』
1865 救世軍の設立		
	1873 大不況始まる 1884 フェビアン協会成立	
	1899 ブーア戦争勃発 1906 労働党の成立 1929 世界恐慌	1914 第一次世界大戦 ～19 1917 ロシア革命 1939 第二次世界大戦 ～45

〔年表1〕 イギリス・

		ク　エ　イ　カ　ー　史		
		重　要　項　目	神　学	教　会　組　織
1650	初 期	1652　クェイカー運動の開始	1676　Barclay『弁明』	1667　全国に月会・季会・婦人集会を設立
		1656　Bristol Venture		1676　Meeting for Sufferingsの設立
		1660年代　多くの指導者死去		1678　ロンドン年会の設立
1690	静 寂 主 義 の 時 期	1682　Pennsylvania 植民開始	1825　J.J. Gurney 『エッセーズ』	1682　最初の Queries
1700		1691　G. Fox 死去		1722　ロンドン年会がすべての月会に対して長老を任命するよう要請
1750		1760　ロンドン年会による紀律強化のための委員会の設立		1737　membership の規定
				1738　Book of Extracts の作成
1800				1752　月会の整理統合開始
1830	福 音 主 義 の 時 期		1754　牧会者・長老年会の設立	
1850			1783　Book of Extracts の印刷	
			1784　婦人年会の設立	
			1791　General Advices の発行	
			1794　準備会の機能の明確化	
1890	自 由 主 義 の 時 期	1886　E. Worsdell 『神の助力の福音』	1857　年会の議事録の公開	
1900			1859　クェイカー派の会堂における非国教徒との結婚式の認可	
			1860　Advices and Queriesに変更が加えられた	
			1861　Book of Disciplineの完全なる改訂	
			1862　信教徒統計の作成	
1950			1868　フレンズ海外伝道協会の設立	
			1876　牧会者・長老年会を廃止し M & O 集会を設立	
			1882　国内伝道委員会の設立	
			1896　男子集会と婦人集会の統合	
			1906　M & O 集会を廃止	
			1924　recording ministersの慣行を廃止	
			1926　フレンズ・ハウスの設立	
			1940　Birthright Membership についての新しい制度	
			1959　Birthright Membership の廃止	

〔図2〕 THE RELATIONSHIP OF FRIEND COMMITTEES



二十世紀のクエイカー派においては、以上の他にも多くの組織上の変化が起ったが、それらは、クエイカー派の宗教思想において自由主義神学が主流を占めるようになったこととは関係がない。以下にそのうちの主要なものを挙げるが、それらはむしろ単に組織上の合理化の所産と言えそうである。

第一は、中央行政機構の発展である。二十世紀にはロンドン年会、あるいは受難対策集會に直屬する多くの常設の委員会が設立され、一九六五年の時点では〔図2〕のような諸委員会が存在していた。また一九二六年には、ロンドンのユーストンにフレンズ・ハウスが建設された。フレンズ・ハウスには図書室、書籍購買部、年会のための會議室、常設諸委員会の事務室等が設置

された。⁽³⁰⁾

第二は、男子教会業務諸集会と婦人教会業務諸集会の統合である。これは一八九六年の年会において決定された。⁽³¹⁾

第三に、生得教会資格 (Birthright-membership) をめぐる変化がある。二十世紀において子供たちへの教会員資格の付与について、何度かの改正が行われたが、最終的には一九四〇年にロンドン年会は次のような二者択一方式を決定した。すなわち、両親が生れた子供に生得教会員資格を与えることを望む場合には、その子供の生得教会員資格が認可される。他方、子供が成人してからその子自身に教会員として留まるか否かの選択をさせたい両親の子供には、暫定的な教会員資格 (temporary membership) を認める、⁽³²⁾ というものである。

以上、四つの時期に区分して論述してきたイギリス・クエイカー史の概観は、あまりにも単純・明快にすぎる概観かも知れない。しかしながら、ここでは、三五〇年に及ぶイギリス・クエイカー史の大きな流れ、その大まかな時期区分、それぞれの時期におけるクエイカリズムの基本的性格の把握だけが問題なのであって、それらの諸点についての我々の理解には、ほぼ誤りが無いものと信じる。最後に、イギリス・クエイカー史に関する以上の論述の理解を助けるために、⁽³³⁾ 「年表1」を付す。

(1) Elizabeth Isichei, *Victorian Quakers*, London, 1970., p. 33. 又 Rufus M. Jones, *The Later Periods of Quakerism*, London, 1921., reprinted copy, Westport, Conn., 1970., p. 962. を参照せよ。

(2) リッチェル学派は、リッチェルの主著『義認と和解』の第三巻が出版された一八七四年以来、彼に追隨する一群の神学者によって形成され、だいたい一九〇〇年頃までドイツにおける有力な学派として君臨し、イギリス、アメリカにも多大の影響を及ぼした。だが、自由主義神学の担い手はリッチェル学派につきるわけではない。自由主義神学は広い意味では、ドグマティズムに反対して人間の主体的な活動の意義と余地を認める神学的立場をいうのであって、その特徴は、聖書やキリストや信仰の理解を、批判精神や科学的な歴史研究や宗教的経験や信仰の実

存的把握と結びつけることに存する。したがって広い意味での自由主義神学の先駆は、シュライエルマッハーの神学やヘーゲル哲学に見い出される。そして自由主義神学の流れは現代のブルンナーやブルトマンの神学にまで及んでいる、と言える。

- (3) イシチェイによれば、リッチェルの著作が英米でよく読まれるようになったのは、一八九〇年代になってからである。Isichei, *op. cit.*, p. 38.
- (4) Anon., *A Reasonable Faith: Short essays for the Times, By Three Friends*, London, 1884. その匿名の著者は、Francis Frith, William Pollard 及び William Edward Turner の三人である。

- (5) Jones, *op. cit.*, p. 964.

- (6) *Ibid.*, p. 965.

- (7) *Ibid.*, p. 965.

- (8) Isichei, *op. cit.*, p. 36. クェイカー自由主義神学におけるこのような「内なる光」の理解の仕方を、クェイカリズムの初期において先取りしていたのがジョージ・ビショップである。本稿(上)『商経論叢』十九巻一号、五七―五八頁を参照せよ。

- (9) 『合理的信仰』をめぐる論争については、Jones, *op. cit.*, pp. 965-67. を見よ。

- (10) Edward Worsdell, *The Gospel of Divine Help*, London, 1886.

- (11) *Ibid.*, pp. 79-80, 161. Cf. Isichei, *op. cit.*, pp. 36, 38.

- (12) E. Vipont Brown, *The Friend* (1923), p. 685, cited in Isichei, *op. cit.*, p. 36.

- (13) E. Worsdell, *op. cit.*, pp. 30ff. cited in Isichei, *op. cit.*, p. 37.

- (14) 彼は *Quakerism and Industry before 1800*, London, 1930 の著者イザベル・ドラップのいふことにあたる。

- (15) Isichei, *op. cit.*, p. 40.

- (16) 彼は『クェイカリズム―過去と現在』の著者ジョン・ステイヴンソン・ラウントリの弟でチョコレート企業家の、ジョゼフの長男である。つまりジョン・ステイヴンソンは彼にとって伯父にあたる。ラウントリ家の人々については拙稿『商経論叢』十七巻二号、一〇三―一〇五頁を見よ。またジョン・ウィルヘルム・ラウントリのリーダーシップについては、Jones, *op. cit.*, pp. 978-979. を見よ。

- (17) *Report of the Conference... held... in Manchester*, London, 1886, pp. iv-v.

- (18) *Ibid.*, pp. vi-vii.

- (19) Isichei, *op. cit.*, p. 41. なおマンチェスター会議におけるジョン・ウィルヘルム・ラウントリ、トマス・ホジキンおよび自然科学者シルヴァス・P・トムソンの報告のサマリの部分は、Jones, *op. cit.*, pp. 973-976 にまとめられている。

- (20) Jones, *op. cit.*, p. 977.

- (21) Isichei, *op. cit.*, p. 41.

- (22) 「ラウントリ・シリーズ」の諸著作とは、次の六点を言う。R. M. Jones, *Studies in Mystical Religion*, 1909; R. M. Jones, L. Sharpless and A. M. Gummere, *The Quakers in the American Colonies*, 1911; William C. Braithwaite, *The Beginnings of Quakerism*, 1912; R. M. Jones, *Spiritual Reformers in the 16th and 17th Centuries*, 1914; W. C. Braithwaite, *The Second Period of Quakerism*, 1919; R. M. Jones, *The Later Periods of Quakerism* (2 vols.), 1921.
- (23) ウッドブルック・カレッジ創立の計画を推進したのはジョン・ウァイルヘルム・ラウントリであり、カレッジ創立のために土地と建物を提供したのはバーミンガムのチョコレート企業家、ジョージ・キャドベリーであった。ウッドブルック・カレッジの現状については、拙稿「Woodbrooke College 留学記」Anglo-Japan News (英日ニュース) 英日文化協会第七号 (一九八〇年) を見よ。
- (24) L. H. Doncaster, *Quaker Organisation and Business Meetings*, London, 1958., pp. 51-52.
- (25) Isichei, *op. cit.*, pp. 82-83.
- (26) 本稿(上)『商経論叢』十九卷一頁、五九頁、注(12)。
- (27) Doncaster, *op. cit.*, p. 50.
- (28) 本稿(上)『商経論叢』十九卷一頁、五九頁、注(14)。
- (29) *Advances and Queries*: 1964 edition., p. 6.
- (30) Doncaster, *op. cit.*, p. 55.
- (31) *Ibid.*, p. 46. (32) *Ibid.*, p. 59.
- (33) 「年表1」の作成については、妻、正子の手をわずらわせた。

三 イギリス・クエイカー社会史の諸問題

本章では、興隆期から現代に至るまでのイギリス・クエイカー史の社会史的な諸問題として、人口動態と人口移動、社会層構成の変化、およびリーダーシップの変化の問題をとり上げて論じたい。ただし前もって指摘しておかなければならないのは、十八世紀イギリス・クエイカリズムについては以上のような問題の解明に役立つ統計史料が全く存在しないし、統計を作成するためのデータさえ存在しない、ということである。これは十八世紀イギリス・クエイカー派において静寂主義が主流を占めたことの悪しき結果である。

A 人口動態と人口移動

イギリス・クエイカー派の信徒数に関する、現在のところ最も信頼出来る数値を年代順に並べたのが「表1」である。

〔表1〕 イギリス・クエイカー派信徒数

1661	約 30,000人
1680	約 60,000
1800	約 19,800
1840	16,227
1851	14,016
1861	13,859
1871	14,021
1881	15,113
1911	19,612

供をも含めて、約三万人から四万人と推定する⁽³⁾。この時には教祖ジョージ・フォックスなどは逮捕を免れてはいるものの、大半の成年男子クエイカーが逮捕されている。また、興隆期においてクエイカーになった者は、30歳台、40歳台の者が多く、家族そろってクエイカーになるという例も興隆期においては少ない⁽⁴⁾。したがって私は、一六六一年におけるクエイカー信徒数として、ブレイスウェイトが考える数値の幅の下限を採用しようと思う。

その後、王政復古期を通してクエイカー派の信徒数は、大迫害にもかかわらず、増加し続けたようである。そして、クエイカー信徒数が最高の数値を示すのは、一六八〇年頃だと言われている⁽⁵⁾。アラン・コウルは一六八〇年頃にはク

興隆期におけるクエイカー派信徒数の増加がかなりのものであったことは想像に難くないが、その実数を推計するデータは一六六一年にならないと現れない。すなわち王政復古後の一六六一年一月に第五王国派の中の武闘派ヴェンナー派数十名が蜂起して、その全員が虐殺あるいは逮捕される、という事件が起った⁽¹⁾。この事件はヴェンナー派だけの蜂起であったのだが、支配階層はこれを大規模な陰謀の氷山の一角とみなし、クエイカー派、浸礼派、会衆派の一斉逮捕を開始した⁽²⁾。この時に逮捕されたクエイカーの人数が約四千二百名だったが、逮捕されたのは成年男子のみであったので、ブレイスウェイトはこの当時のクエイカー信徒数を、女性と子

〔表2〕 1851年における信徒数

国教徒	約 2,300,000人
メソヂスト諸派	約 694,000
会衆派	約 515,000
バプテリスト派	約 353,000
クエイカー派	14,016

〔表3〕 メソヂスト派信徒数と対全人口比(イングランド)

1767年	22,410人	—
1771	26,119	—
1781	37,131	—
1791	56,605	—
1801	91,825	1.6%
1811	143,311	2.3
1821	215,466	2.9
1831	288,182	3.4
1841	435,591	4.5
1851	490,000	4.4
1861	513,628	4.1
1871	570,936	4.1
1881	630,575	4.0
1891	690,022	3.8
1901	732,668	3.5
1906	800,234	3.6

〔出典〕 A.D. Gilbert, *op. cit.*, pp. 31-32, Tables 2.2 より作成。

イギリス・クエイカー派の信徒数は、しかしながら、十八世紀中に急激に減少して、ラウントリの推計によると、一八〇〇年には約一九、八〇〇人となった。⁽¹⁰⁾一八四〇年における信徒数一六、二二七人は、ラウントリが実際に算定した結果である。⁽¹¹⁾〔表1〕の

クエイカーの信徒数は一六六一年の約二倍(すなわち、六万人から八万人)になったと推計しているが、一六八〇年頃の信徒数を算定するためのデータは何も現存しない。一六九六年に匿名氏によって著わされた反クエイカー派の書物『草の中の蛇』では、当時のクエイカー派の信徒数は十万人を越える、と記されているが、これにはかなりの誇張が含まれているであろう。⁽⁷⁾他方、ダルリンプル伯の回想録にもとづくならば、当時のクエイカー派信徒数は、約五万人となる。⁽⁸⁾しかし、これは過小評価のように思われる。というのは、ダルリンプルは、当時の非国教徒の総数を約二十万人と見積もる調査結果を採用しているのだが、これは国教会当局の調査発表だから、非国教徒の総数は意識的に過小評価されるのが当然だからである。ジョン・S・ラウントリは、『草の中の蛇』およびダルリンプルの回想録の両者の数値をにらみながら、一六八〇年頃におけるクエイカー派信徒数を、イングランドだけで六万人以上、イギリスとアイルランドで約六万六千人、と推計している。⁽⁹⁾これは大体妥当な推計のように思われる。

〔表4〕 会衆派と浸礼派の信徒数（イギリス）と対全人口比

年代	会 衆 派	対全人口比	浸 礼 派	対全人口比
1750	15,000	—	10,000	—
1790	26,000	—	20,000	—
1800	35,000	0.65%	27,000	—
1838	127,000	1.38	100,000	1.09%
1851	165,000	1.52	140,000	1.29
1863	180,000	1.56	153,000	1.24
1870	—	—	170,000	1.26
1880	—	—	201,000	1.31
1890	—	—	221,000	1.25
1900	257,435	1.27	239,114	1.19
1910	287,952	1.23	266,224	1.14
1914	289,545	1.21	264,923	1.11

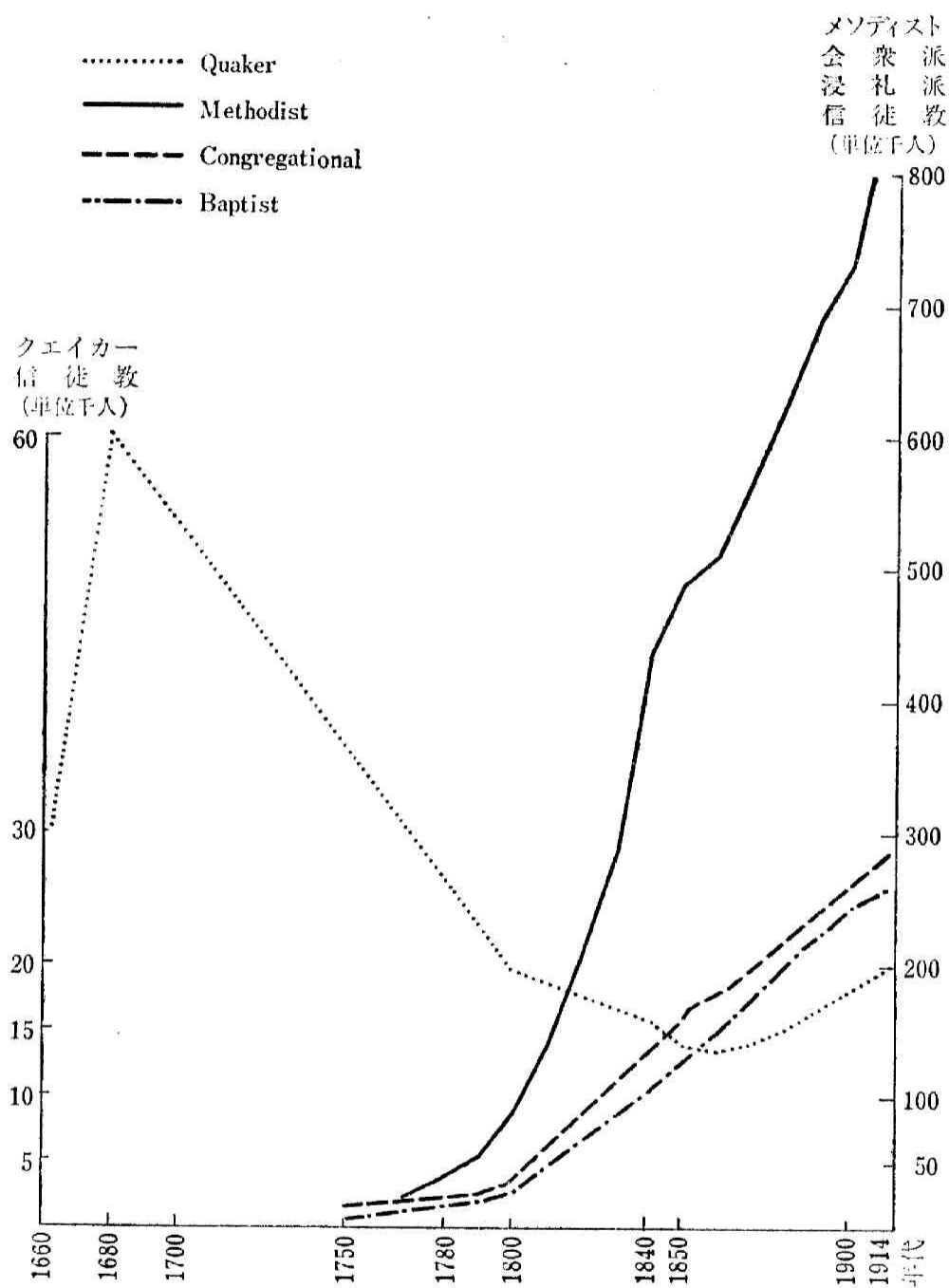
〔出典〕 A.D. Gilbery, *op. cit.*, p. 37, Table 2.4 より作成。

中の一八五一年における信徒数としては、同年に行われた国勢調査の結果を記載した。この国勢調査によって明らかになった他の諸宗派の信徒数は「表2」に記されるが、これを見ると、クエーカー派がまったく取るに足りない弱小セクトになってしまっていることが、よくわかる。国勢調査の結果は、クエーカー派の指導者たちに大きな衝撃を与え、一八六一年以降は毎年、信徒数の公式の統計が算定されるようになった。⁽¹³⁾

以上を要するに、イギリス・クエーカー派の信徒数は、初期において上昇を続け、一六八〇年頃にその最高値を示すが、十八世紀を通じて減少を続け、一八六〇年頃にその最低値を示し、以後わずかながらも着実に増加した、と言うことが出来る。

このようなイギリス・クエーカー派の信徒数の増減の様子は、他の非国教徒の信徒数の増減の様子とは全然異なったパターンを示している。「表3」および「表4」は、メソヂスト諸派、会衆派および浸礼派の信徒数の変化と、各派の信徒数のイングランド（あるいはイギリス）の総人口に対する百分比を示したものである。⁽¹⁴⁾これらのうち、メソヂスト派の運動は一七四〇年代から本格的になった。他方、会衆派と浸礼派は十七世紀の四〇年代に形成さ

〔図 3〕



れ、十七世紀後半と十八世紀の前半にはアメリカへの移住の影響で信徒数が減少したと推測されるが、この期間の信徒数の変化については、これらの表からは何も知ることが出来ない。しかし、「表3」および「表4」を見ると、一七五〇年以降におけるこれら非国教徒主要三派の信徒数の変化が、ほとんど同じパターンを示していることがわかる。

すなわち、これら三派の信徒数は大体一七八〇年ごろから一八四〇年ごろまでの期間（この時期が大体イギリス産業革命の時期であることに注意せよ）に急増し（メソヂスト派は約11倍、会衆派は6倍以上、浸礼派は5倍以上）、一八四〇年頃には対全人口比において一定の水準に達し（メソヂスト派は約4%、会衆派は約1.3~1.5%、浸礼派は1.1~1.3%）、それ以後、十九世紀末にいたるまで、イギリスの総人口に対する信徒数の比率をほぼ一定の水準に保ちつつ、その信徒数を伸ばしていったのである。以上のような三派の信徒数の変化のパターンとクエイカー派の信徒数の変化のパターンの相違は、それらの数値を折れ線グラフにして示した〔図3〕によって、ますます明らかになるであろう。⁽¹⁵⁾

それでは、メソヂスト派、会衆派、バプティスト派の三派の信徒数の変化とイギリス・クエイカー派の信徒数の変化がこのように極端に異なったパターンを示すのは何故だろうか。まず、三派の信徒数が一七八〇年ごろから一八四〇年ごろにかけて急上昇をとげる原因については、簡単に一般的で常識的な回答を引き出せる。すなわち、この期間にはイギリスにおいて産業革命と農業革命が同時進行した時期であって、この時期に土地を失った農民が大量に労働者として新興の諸工業都市に吸収されたのであった。会衆派、浸礼派、そしてとりわけメソヂスト派は、これらの都市の労働者に対する伝道を積極的に展開して、その信徒数を伸ばした。他方、クエイカー派はそのような伝道を行わなかったし、当時のクエイカー派は、そもそもそのような伝道を行えるような体質を持っていなかった。

しかし、問題はそれだけで解決するわけではない。イギリス・クエイカー派の信徒数は一六八〇年ごろから一八六一年まで、その絶対数において、減少を続けたからである。そして我々がすでに本稿の第二章B節において検討したよ

うに、イギリス・クエイカー派信徒教の減少の原因の解明こそが、J・S・ラウントリ著『クエイカリズム——過去と現在』（一八五九年刊）の課題であったのである。彼によれば、イギリス・クエイカー派の信徒数の減少の根本的な原因は、十八世紀全般および十九世紀初頭のクエイカー派が静寂主義思想を信奉する人々によって指導されたことであつたのであり、この一世紀余りの期間、クエイカー派の伝道や宗教教育の活動は極めて不活発であつたばかりでなく、信徒のアメリカ植民地（のちに合衆国）への移住と、破門の執行によって、その信徒数を減少させ続けたのである。

それでは、アメリカ植民地（のちに合衆国）への移住者と、破門された信徒の人数はどのように変化したのだろうか。——残念ながら、前にも述べたように当該時期のデータそのものがほとんど存在しないために、信徒数の減少の諸原因についての統計数値を示すことは、不可能なのである。しかしながら、きわめて断片的なデータは現存している。ここでは、それらの断片的なデータを利用した諸研究を紹介しながら、推計可能な範囲を示してみたい。

第一に、クエイカー信徒のアメリカ植民地（のちに合衆国）への移住の規模については、J・S・ラウントリの研究がある。彼によれば、アメリカ植民地へのクエイカー派信徒の移住は一六七六年のウエスト・ジャージー植民地の設立⁽¹⁶⁾から一七七五年のアメリカ独立戦争まで継続して行われ、一六七六年から一七〇〇年までは年平均五〇〇名の信徒が移住した⁽¹⁷⁾。したがって十七世紀中のクエイカー移住者の総計は、約一二、五〇〇名となる。十八世紀には非国教徒への迫害は行われなくなったのだから、年平均の移住者数は減少したであろうが、十八世紀におけるクエイカー移住者数はまったく不明である。しかし、一六七六年から一七七五年までの百年間のクエイカー移住者数は大体二万五千人から三万人のあいだぐらいだ、とみなすのが適切であろうと思われる。

第二に、破門されたクエイカー信徒数についても、十八世紀におけるデータは皆無である。しかし、十九世紀前半

[表 5]

Meeting	Brighthouse	Bristol	Devonshire House	Frenchay	Gloucester	Marsden	Pontefract	Witham	Warwickshire North	York	
1801 年 信 徒 数	—	—	—	166	84	—	—	—	—	—	
1851 年 信 徒 数	820	—	—	80	112	—	430	—	—	302	
自 発 的 脱 退	—	64	26	7	19	—	12	4	—	19	(計)
破 門 総 数	275	293	253	36	45	177	147	76	170	60	(1532)
結 婚 に よ る も の	163	97	120	12	18	118	68	26	84	26	(732)
そ の 他 の 理 由	112	196	133	24	27	59	79	50	86	34	(800)
集 会 に 欠 席	—	0	48	—	—	17	0	3	24	4	
教 義	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	
意 見 の 相 違	—	4	0	—	—	0	0	0	0	0	
不 品 行	—	35	54	—	—	14	50	16	11	13	(193+ α)
詐 欺 行 為	—	0	0	—	—	2	0	0	5	1	
酒 の 飲 み す ぎ	—	0	0	—	—	0	0	5	1	0	
破 産	—	78	31	—	—	25	12	16	26	13	(201+ α)
軍 隊 に 入 籍	—	0	0	—	—	1	0	0	7	0	
十 分 の 一 税	—	0	0	—	—	0	0	1	4	0	
そ の 他	—	79	0	—	—	0	17	9	8	3	
小 計	112	196	133	24	27	59	79	50	86	34	

[出典] D.J. Hall, *op.cit.*, pp. 98,99., Table 1 および Table 3 より作成。

注意 1) —部分是不明

2) Devonshire House は 1800—1853 年の, Pontefract は 1800—1845 年の, Warwickshire North は, 1800—1850 年の統計数値である。

におけるデータはかなり充分に存在しており、ラウントリーはこれらのデータを利用しつつ、一八〇〇年から一八五六年の間に破門された信徒とみずから教団から脱退した信徒の合計を約八、四〇〇名と推計している。他方、同じ期間に改宗してクエイカー教徒になった人と、以前クエイカー派を脱退したけれども再びクエイカー派に戻った人との合計は、約六、〇〇〇名と推計されている。⁽¹⁸⁾クエイカー派において破門の執行がさかんになったのは一七六〇年頃からであるから、一六八〇年から一八五〇年頃までに破門あるいは脱退によって失われた信徒数の延べ人数は、一万五千名から二万名のあいだぐらいだ、と推定できる。

次に破門の理由について見よう。J・S・ラウントリーは、破門の細目ごとの破門者数の統計を『クエイカリズム——過去と現在』の中で示していないけれども、彼が集めたデータはJ・S・ラウントリー・ペイパーズとして、ロンドンのフレンズ・ハウス図書室に所蔵されている。D・J・ホールはこのラウントリー・ペイパーズを使って最近、幾つかの月会の管轄地域について、一八〇一年から一八五一年までの期間のクエイカー信徒の破門の理由についての統計を作成した。⁽¹⁹⁾「表5」はD・J・ホールが作成した統計表をまとめ直したものである。イギリスにおけるクエイカー派の月会の数は一六九一年に一五一に達し、一七五二年以降、整理統合が行われて一九五七年には六九にまで減少したのだが、⁽²⁰⁾一八〇一年から一八五一年の間の全国の月会数については筆者にはわからない。多分、八〇—一〇〇位の数であったのだろう。「表5」はわずか10の月会管轄地域の信徒に関する統計であるが、その中にはブリッグハウス月会、プリストル月会、デヴォンシア・ハウス月会などの大規模な月会が含まれていることに注意すべきである。なお、これらのうちの六つの月会の、この期間における出生者総数は、同期間の死亡者総数を若干上まわっている。⁽²¹⁾

さて、「表5」を見ると、表中の十の月会管轄地域における一八〇一年から一八五一年までの破門者総数は一、五三二名であり、信徒数のうちで破門された者の割合は、二割から、多いところでは六割を占めるようである。破門の

理由で一番多いのは、クエイカー以外の者との結婚（いわゆる Mixed-marriage）であつて、これが全体の約48%を占める。その他の理由で特に多いのは、不品行と破産である。不品行を理由とした破門件数が多いことは、クエイカーといえども、品行方正なる者は案外少なかった、ということを示すと同時に、当時の指導者達の倫理・道徳感が異常に厳しかった、ということをも示している。他方、破産を理由として信徒を破門するということは、クエイカー派、とりわけこの時期のクエイカー派に特有の現象であり、それはイギリス・クエイカー派の特殊な経済倫理と切り離して考えることは出来ないが、この問題については筆者は「クエイカー派の経済倫理について」と題する別稿において、すでに論じたことがあるので、本稿においては改めて論ずる必要がない。⁽²²⁾

次に我々は、イギリス・クエイカー派信徒の人口移動について検討しよう。興隆期クエイカー派信徒の地域的分布とその意味するところについては、筆者はすでに別稿において論じたことがあるので、⁽²³⁾それを参照されたいが、要するに興隆期のクエイカー派の拠点は北部丘陵地帯であつた。一六五四年夏以後、南部伝道が開始されるが、西部と西南部では小さな町々にクエイカー派の集まりがある程度組織されたけれども、東部と南部ではごくわずかの集会が組織されただけであり、王政復古にいたるまで、ロンドンとブリストルを除けば、依然として北部イングランドがクエイカー運動の中心地だったのである。

王政復古から名誉革命までの期間にイギリス・クエイカー派の信徒数が倍増した、ということは前述のとおりだが、この期間に特に著しい信徒数の増加を見たのはロンドンだったようで、興隆期におけるクエイカー派のロンドン伝道の拠点、ブル・アンド・マウス集会の他に、一六九〇年頃には、デヴォンシア・ハウス月会、ライクリフ月会、サザーク月会、ピール月会、ウェストミンスター月会と、五つの月会が存在していた。⁽²⁴⁾クエイカー派の年会や受難対策集

会その他の中央諸集会在ロンドンに設置されたことからわかるように、ロンドンは王政復古期にクエイカー派の最大の拠点になったようである。何故ロンドンにおけるクエイカー派の信徒教が増大したのか、という点については、具体的なデータは今のところまったく存在しないけれども、一つの理由としては、クエイカー派の伝道活動の成功があげられるだろう。⁽²⁵⁾ もう一つの理由としては、地方に住んでいたクエイカー派信徒のロンドンへの人口流入があげられるだろうが、しかし、地方からロンドンへの一般的な人口流入の傾向は十七世紀を通じて一貫した動きなので、これは、クエイカー派に特徴的な人口移動の傾向とは言えない。

王政復古期から十八世紀初頭にかけてのクエイカー派に特徴的な人口移動の傾向として指摘されてきているのは、農村部から都市部への移動、それも自治都市へではなくて、非自治都市への移動である。この論点を最初に指摘したのはA・レイストリックであろう。彼は、一六六一年に制定された自治都市法(The Corporation Act)のために、クエイカーが自治都市で生業を営むことはほとんど不可能になり、「クエイカーたちはバーミンガムのような非自治都市(non-corporate towns)に集まるよう、うながされた」⁽²⁶⁾と述べる。またレイストリックは、「クエイカーたちの第二、第三世代において、『彼等を』農業から引き離して商業に向わせる二つの傾向があった」⁽²⁷⁾とも述べている。二つの傾向のうちの一つは、「十分の一税」支払拒否の結果である。つまり、クエイカーたちは「十分の一税」の支払いを拒否したため、税額の数倍の財産を没収されることになったが、農民の場合には家畜が没収物件になり、商人の場合には在庫品が没収物件になったので、没収による経営のダメージは商人の方がはるかに少ない。したがって、多くのクエイカーが農業を捨てて商業を営むようになった、というのである。また、第二にはクエイカー運動は平信徒牧師の運動なので、絶対に土地を離れることの出来ない忙しい季節のある農業よりは、営業を女房、子供に任せてでも自由に伝道の旅に出られる商業の方が、好ましかった、⁽²⁸⁾と言う。

このようにレイストリックは明確な理論的根拠を示して、王政復古期から十八世紀初頭に至る時期のクエイカー人口の非自治都市への集中傾向と、農業部門から商業部門への移動を推論したのだけれども、しかし彼は、その具體的なデータをまったく示さなかった。そして、当該時期における信徒の地域的移動の実態分析の試みは、いまだに、二、三を数えるのみである。それらのうちでもアメリカの宗教社会学者 R・T・ヴァンの研究は注目に値する。

彼の研究によると、一七〇〇年にはバッキンガムシアのクエイカー教徒は六〇の教区 (parish)⁽²⁹⁾ に散在していたのだが、一七四〇年には三名以上のクエイカーが居住する教区は二六に減少し、都市部の五つの教区に住むクエイカー教徒の数が、州全体のクエイカー信徒数の約半数を占めるにいたった。またノーファクでも同じ期間に同様の傾向が見られ、一七四〇年にはイースト・ディアラム、ウェルズ、およびウィマンドラムの三都市だけで、ノーファク全体のクエイカー人口の約四分の一を抱えることとなった。またノーファクの州都ノーリッジのクエイカー人口は、一六八九年には二五三名であったが一七四〇年には四二八名と約一・七倍増加している。⁽³⁰⁾ ヴァンが当該時期について統計的研究を行った対象地域は、バッキンガムシア、ノーファクおよびノーリッジに限られるのだが、彼はこれらの地域の調査をふまえて「フレンズの都市への集中傾向は、「イングランドの」総人口のそれより、ずっとはなはだしかった⁽³¹⁾」と結論する。

しかしヴァンはそればかりではなく、もう一つの大変興味深い事実を発見している。それは、当該時期のクエイカー信徒の都市部への移住は、農村部一般から都市部一般に対して平均的に行われたのではなくて、特定の都市 (例えばオックスファドシアのアデベリやハーファドシアのヒッチン) に集中するタイプのものだった、ということである。⁽³²⁾ ヴァンはこれを「地域的住み分けの傾向」と呼んでいるが、王政復古期の大迫害に耐え、「静寂主義の時期」の倫理規範を實踐していくためには、クエイカーたちは互いに身を寄せあい、助け合わなければならなかったはずだから、彼等がこのように特定の小都市に集住したというヴァンの仮説は、充分に説得力を持っている。

他方、このような通説に対する批判を試みたのはハーウィッチである。彼女はウォリックシアにかんするクエイカー派の人口統計学的研究を行なったのだが、それによると、ウォリックシアでは、一六六〇年から一六八九年のあいだには、クエイカー信徒の農村部から都市部への移動の傾向は見られず、移動の傾向が明らかになるのは十八世紀に入ってからである。⁽³³⁾ハーウィッチの結論は、もし正しければ、レイストリックの仮説に対する一つの重大な反証となり得る。しかし、筆者の見方によれば、ハーウィッチの史料操作には一つの重大な疑念がつきまとう。それは、彼女が「ウォリックシアでは、クエイカリズムは北部の半工業化された農村地域 (the semi-industrial rural areas of the north) に根をおろしていた」⁽³⁴⁾と指摘している事実に関係する。ウォリックシアの北部の半工業化された農村地域とは、のちの新興金属工業都市バーミンガムとその周辺地域なのである。この地域は早くも十七世紀前半に重要な金属工業地帯となっていたが、その発達は一六七〇年頃から特に急激であった。バーミンガム・マナ (バーミンガムは十八世紀中は政治上はマナにすぎなかった) の人口は一六五〇年の五、五〇〇人から一七三〇年までに四〇五倍に増加し、またその北側に隣接するブラック・カントリーでも人口が増加し、多くの金属工業町が繁栄した。そればかりではなく、十八世紀に入るところにはこうした金属工業の町々をつないで、これまた金属工業を営む農村が、連綿と連なっていたのである。⁽³⁵⁾

ハーウィッチが都市と農村の区別をする際に、このような経済史的な背景を充分に考慮していたか否かは大いに疑問である。要するに、ハーウィッチが言うように、十七世紀中にはクエイカー信徒の農村部から都市部への移動が見られないにしても、彼等が集中して住んでいた地域自体が、急速に工業地域として成長しつつあった農村部だったのだから、彼女の「発見」は、通説に対する反証には、どうしてもなり得ないのである。

王政復古期から十八世紀前半の時期についてのクエイカー信徒の人口統計学的研究は、以上紹介した程度にしかな進んでいない。そして現段階では、当該時期におけるクエイカー信徒の農村部から都市 (とりわけ非自治小都市) への

移動は、イングランド全人口の移動より顕著で、しかもクエイカーたちは特定の小都市に集住する傾向があった、という暫定的な結論を提示しても良いだろう、と思われる。

次に十八世紀後半以降のクエイカー派信徒の人口移動については、それが農業革命と産業革命の同時進行した時代であるから、かなり激しい移動の存在が想定されるにもかかわらず、史料の不備のためか、これまでに一つの調査研究も行われていない。したがって我々は一足飛びに十九世紀後半に関するイシチェイの研究に移らねばならない。

イシチェイは、まず、一八五一年の国勢調査によって明らかになるクエイカー派信徒の地域的分布と、一九〇四年にロンドン年会が行なった調査によるそれとを比較して、二つの時期における信徒の地域的分布にほとんど変化が無いことを指摘する⁽³⁶⁾。次に彼女は、各州ごとの、クエイカー派信徒数の対州全人口比を算定する。その比率が八〇〇人に一人以上となっている州は、まず北部のヨークシアのノース・ライディングとウエスト・ライディング、そして、ウエストマランドとカンバランドである。これらの地域はクエイカー派発祥の地であり、この時期においても依然としてクエイカー教徒は多かったのである。それより南の地域ではクエイカー派人口の対州全人口比が八〇〇分の一以上の州は、グロースターシア、オックスファドシア、ウォリックシア、エセックス、ハーフアドシアである。しかしながら、よく調べてみると、これらの州のクエイカー信徒数の対州全人口比が大きいのは、それらの州の中にクエイカー派が集住した都市（例えばウォリックシアのバーミンガム、グロースターシアのブリストルとサイアランセスター、オックスファドシアのバンベリー、オックスファドとチッピング・ノートンなど）が存在したためである⁽³⁷⁾。したがって、「最も重要な相違は、一州と他の州のあいだによりは、都市部と農村地域のあいだにあるようだ」と彼女は結論する。

要するに彼女の研究によって、クエイカー信徒の農村地域から都市部への移動（特にクエイカーの共同社会がその中ですでに形成されていた都市への移動）の傾向は、十九世紀後半と十九世紀前半のあいだにますます強化されていたこと

が明らかになった。彼女自身の言葉を使うならば、「歴史的な経緯を通じて、クェイカリズムはノリッジ、バンベリー、ケンダル等の少数の小都市にも強力に浸透したけれども、一八五一年と一九〇四年には、ほとんどのフレンズは巨大な産業諸都市の大きな集会のメンバーだったのである」⁽³⁸⁾。

- (1) この事件については B.S. Capp, *The Fifth Monarchy Men: A Study in Seventeenth-century English Millenarianism*, London, 1972., p. 199 を参照せよ。
- (2) *Ibid.*, pp. 199-200.
- (3) W.C. Braithwaite, *The Beginnings of Quakerism*, London, 1912., second edition, 1955, p. 512.
- (4) 初期クェイカーの回心のパターンについての社会的研究は R.T. Vann, *The Social Development of English Quakerism 1655-1755*, Cambridge, Mass., 1969, Chapter I に詳しく扱われている。
- (5) John S. Rowntree, *Quakerism, Past and Present*, London, 1859, p. 71. 参考 W. Alan Cole, 'The Quakers and the English Revolution' in T. Aston ed., *Crisis in Europe, 1560-1660*, London, 1965, p. 354, n. 57. その理由は、ラウンツリーによれば、クェイカー派における結婚と子供の誕生の件数が最大値を示すのが一六七〇年代であり、また一六八〇年以後は、アメリカ植民地へのクェイカーの移住が本格的に始まるからである。
- (6) W.A. Cole, *op. cit.*, p. 354.
- (7) Anon., *The Snake in the Grass: or, Satan transform'd into an Angel of Light, &c.*, 2nd edition, London, 1696, p. 245.
- (8) J.S. Rowntree, *op. cit.*, pp. 69-70.
- (9) *Ibid.*, p. 72.
- (10) *Ibid.*, p. 87. ラウンツリーは、クェイカー派においては結婚の記録がかなり確かに残されていることに注目して、結婚件数に当時の出生率を掛けあわせて、信徒数の増加を推定するという方法を採用している。
- (11) *Ibid.*, p. 87. なお、十九世紀に入ってから十年毎の信徒数は、ラウンツリーの算定によれば、「表6」のようである (*Ibid.*, p. 88)。約五〇年間に、信徒数の四分の一が失われたことになるが、信徒数減少の原因については後述する。
- (12) Elizabeth Isichei, *Victorian Quakers*, London 1970, p. xix より作成。なお、当時のイギリスの総人口は約

〔表6〕

1800年	19,800人
1810	18,920
1820	18,040
1830	17,160
1840	16,277
1847	15,345
1856	14,530

1800年 19,800人
1810 18,920
1820 18,040
1830 17,160
1840 16,277
1847 15,345
1856 14,530

二千百万人。また、「表2」の数値は、いわゆる Census Sunday に登録した人の数なので、実際の信徒数はもう少し多いと思われる。「表2」の数値の合計は四百万人足らずであるから、特に国教徒信徒数は実際には「表2」の数値の数倍であろう。

- (13) 一八六一年以後のクエイカー派信徒数の数値は、A.D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England: Church, Chapel and Social Change 1740-1914*, London, 1976, p. 40, Table 2.5 より借用。なお、一九六八年におけるイギリス・クエイカー派の教会員数は、二〇、九〇九人であった。

- (14) 「表3」は、一七六七年から一七九一年まではウエズレイアン・メソヂストの信徒数を、一八〇一年と一八一一年については、ウエズレイアン・メソヂストとニュー・コネクション両派の信徒数合計を、一八二一年から一九〇六年までについては、ウエズレイアン・メソヂスト、ニュー・コネクション、プリミティヴ・メソヂスト、バイブル・クリスティアンおよびユナイテッド・メソヂスト・フリー・チャーチズの諸派の信徒数の合計を記したものである。また「表4」の浸礼派の信徒数は、一八九〇年までについてはパティキュラー・バプティスト派とジェネラル・バプティスト・ニュー・コネクション派の両派の信徒数を合計したものである。この両派は一八九一年に合併して the Baptist Union of Great Britain and Ireland を形成した。したがって一九〇〇年以後については、バプティスト・ユニオンの信徒数が記されている。なお、「表3」および「表4」における「対全人口比」というのは、各派のイングランド（あるいはイギリス）の総人口に対する百分比である。

- (15) 「図3」におけるクエイカー派信徒数の縮尺は左側の、メソヂスト派、会衆派、浸礼派の信徒数の縮尺は右側の縮尺による。前者の縮尺が後者の縮尺の一〇倍であることを注意されたい。

- (16) ウェスト・ニュー・ジャージーはストラットン卿ジョン・バークリーの所有地であったが、ウィリアム・ペン、ガーウィン・ローリー、ニコラス・ルーカス等のクエイカーが資金を出しあってこれを買取り、一六七六年にはおもにウィリアム・ペンとエドワード・ビリングの手になる憲章 (The Concessions and Agreements of West New Jersey) が作成され、この土地はおもにクエイカーの入植者に払い下げられた。ペンシルヴァニア植民地における程に大規模ではないにしても、ウェスト・ニュージャージーは、クエイカー教徒の最初の植民地として位置づけられる。ウェスト・ニュー・ジャージー植民地買収の次第について、簡単には H. Barbour and A.O. Roberts eds., *Early Quaker Writings: 1650-1700*, Grand Rapids, Michigan, 1973, pp. 408-409 を参照せよ。また、ウェスト・ニュー・ジャージー憲章の主要部分は H. Barbour and A.O. Roberts eds., *op. cit.*, pp. 422-430 に収録されている。

- (17) J.S. Rowntree, *op. cit.*, pp. 73-74.

- (18) *Ibid.*, pp. 75, 84-85.

- (19) David J. Hall, 'Membership Statistics of the Society of Friends, 1800-1850' in *Journal of the Friends' Historical Society*, Vol. 52, No. 2, 1969.

- (20) L. Hugh Doncaster, *Quaker Organisation and Business Meetings*, London, 1958., p. 29.
- (21) Bristol, Frenchay, Gloucester, Pontefract, Wiltshire などの Witham の六月会の出生者総数は一、四〇二名であり、死亡者総数は一、二四一名である。D.J. Hall, *op. cit.*, p. 98, Table 2 を見よ。
- (22) 拙稿『商経論叢』第十四卷三、四号、および『商経論叢』第十五卷一号（共に一九七九年）。
- (23) 拙稿『経済貿易研究』第八号。
- (24) W. Beck and T.F. Rall, *The London Friends' Meetings*, London, 1869, p. 71.
- (25) R.T. Vann の推計によると、バッキンガムシアのクエーカー派信徒数は一六八九年の五二五人から一七四〇年の三七七人へと減少したが、この期間にバッキンガムシアからロンドンに移住した信徒数は八六人であった。しかもその大半はテムズ河南岸サザークに移住している。
Cf. R.T. Vann, *op. cit.*, pp. 162-163.
- (26) A. Raistrick, *Quakers in Science and Industry*, London, 1950, p. 37. 都市自治体法の規定によれば、自治都市の自由市民権を得るためには、国王への忠誠の宣誓 (the oath of Allegiance) を行い、国教会の儀式に従って、主の聖餐の sacrament を拝受せねばならなかったからである。
- (27) *Ibid.*, p. 53.
- (28) *Ibid.*, pp. 53-54.
- (29) Sherington, Chesham, Amersham, Chalfont St. Giles, などの High Wycombe の五つの教区。
- (30) 同上 R.T. Vann, *op. cit.*, p. 163
- (31) *Ibid.*, pp. 163-164.
- (32) *Ibid.*, p. 164.
- (33) Judith J. Hurwich and R.T. Vann, 'Debate: The Social Origins of the Early Quakers' in *Past and Present*, No. 48, 1970, pp. 158, 160.
- (34) *Ibid.*, p. 161.
- (35) 大河内曉男『近代イギリス経済史研究』岩波書店、一九六三年。第一章を見よ。
- (36) E. Isichei, *op. cit.*, pp. 168-169.
- (37) *Ibid.*, p. 171.
- (38) *Ibid.*, p. 169.

B 社会層構成

イギリス・クエイカー派の社会層構成は三百数十年にわたるその歴史の中でどのように変化したのか、とりわけ、本稿の冒頭で指摘した通説、すなわち、興隆期クエイカリズムの担い手は中産下層大衆であったのに、十八、十九世紀のクエイカリズムはブルジョアジーの宗教になってしまった（E・ベルンシュタイン）という通説は正しいのか否か、ということが本節におけるテーマである。

まず初期クエイカーの社会層構成について検討しよう。この問題については筆者はかつて二論稿において論じたことがあるのだが、A・コウルによって史料的に裏づけられたかに見える通説が、R・T・ヴァンの批判にさらされ、いまだに問題の最終的決着がついていないというのが現状である。⁽¹⁾

まず、興隆期におけるクエイカー派の社会層は中産下層が中心となっており、十八世紀以後、その中からかなりの産業企業家が現われてくるというベルンシュタインにはじまる通説は、断片的な史料研究の裏づけを伴いつつ、ベックとボール、テイラー、レイストリック等によって支持されてきたが、初期クエイカーについての大規模な結婚登録簿の調査を通して、この通説を裏づけたのはアラン・コウルであった。彼はイングランドの七つの地域のクエイカーの結婚登録簿に付された職業記載を利用して、初期クエイカーの社会層構成を明らかにし、「初期フレンズは、おもに都市と農村のプチ・ブル層 (*petite bourgeoisie*) から引き出された」と結論した。⁽⁴⁾ その意味は、初期クエイカー派においては、ヨーマン、ハズバンドマン、商人、手工業者の四階層の合計が約九〇パーセントを占め、ジェントリーや日雇労働者がほとんどいない、ということである。

このようなコウルの研究に対して、R・T・ヴァンは社会層分析の方法論に関する批判を加えて、バッキンガムシア、ノーファクおよびノリッジの三地域のクエイカー派の社会層を分析し、次のような二つの結論を得た。第一に、「クエイカリズムは興隆期においては、極めて高い層と極めて低い層を除いて、小ジェントリーから少数のまったくの不熟練労働者にまでひろがるすべての社会層から、その帰依者を引き出した⁽⁵⁾」ということ、また、その中核はヨーマン層と Wholesale Traders⁽⁶⁾であって、これらの層と小ジェントリー層から初期クエイカリズムの指導者たちが輩出したことである⁽⁷⁾。第二は、王政復古期（一六六〇—一六八八年）のあいだに起ったクエイカー派の社会層構成の変化に関するものである。すなわち、土地ジェントリーと Wholesale Traders の全体に対する比率が減少し、手工業者と農村と都市における日雇労働者の比率が増加している傾向に見られるように、「一六七〇年以降の帰依者は、興隆期の帰依者よりも一般的により低い社会層に属していた⁽⁸⁾」というのである。

このようなヴァンの見解に対してハーウィッチは一定の批判を試みている。彼女はクエイカーの社会層を検討する上で、結婚登録簿等の職業記載を利用するばかりでなく、「かまど税」査定 (the hearth tax assessments) 記録をも利用することを提唱し、ウォリックシア一州のみについて、クエイカー信徒の社会層を分析したが、その結果は、ヴァンの見解とは大いに異なったものであった⁽⁹⁾。

〔表7〕は、ハーウィッチが作成した、ウォリックシアのクエイカーの職業構成である。表中の数字は、職業が判名するクエイカー総数に対する、各職業階層に属するクエイカーの人数の百分比である。ただし、各時期における、ウォリックシアのクエイカーの（職業不明者を含めた）総数については、ハーウィッチは明記していない。

〔表7〕から明らかとなる諸点は、第一に、ウォリックシアでは一六六二年におけるジェントリーの比率が低い（2%）ことである（ヴァンが同年代について算定したジェントリーの比率はバッキンガムシアで七・三%、ノリッジで六・三%、ノ

〔表 7〕 ウォリックシアのクェイカーの職業構成

	職 業 階 層	時 期		
		1662以前	1663—1689	1700—1720
農 村	ジェントルマン	2%	1%	0%
	ヨーマン	25	11	7
	ハズバンドマン	17	32	9
	農村の職人	12	19	9
	農業（日雇）労働者	2	6	0
都 市	大商人（merchant）	2	0	9
	専門職	1	0	4
	小商人あるいは自営の職人 （tradesman or master craftsman）	10	10	11
	雇われ職人（artisan）	28	22	49
	不熟練労働者	0	0	0
人 数 計		92名	120名	55名

〔出典〕 Huwich and Vann, *op.cit.*, p.159.

〔表 8〕 「かまど税」 査定から見たウォリックシアのクェイカーの富裕度

富 裕 度	かまど数	ウォリック シア全体	1662年以前 の Ws. のク ェイカー	1662 年 の Ws. のク ェイカー	1663—1689 年の Ws. の クェイカー
貧 困	1	64%	44%	54%	57%
中 位	2—3	22	46	36	36
比較的裕福	4—5	6	10	10	4
裕 福	6—9	3	0	1	2
大 変 裕 福	10以上	1	0	0	1
人 数 計		16,696人	39人	136人	145人

〔出典〕 Hurwich and Vann, *op. cit.*, p. 161.

ノーフアークで七・四%。第二に、一六六二年における中産下層の人々（ハズバンドマン、農村の職人および都市の雇われ職人）の比率が五七%を占めるということ。以上の二点は、ヴァンの見解と対立し、むしろ従来の通説を支持する結果となっている。第三点は時代が下るにつれてクエイカー社会層の下層への収れんが見られること。一六六二年から一六八九年の間の社会層構成の変化として目立つのは、ヨーマンの比率が減少しハズバンドマンの比率が上昇することであり、一六八九年から一七二〇年の間の変化として目立つのは、農村部の人口比率の減少と都市部の人口比率の増加、特に都市の「雇われ職人」の比率の増加である。この現象は、ヴァンが、バッキンガムシア、ノーフアークおよびノリッジについての調査の結果として指摘した傾向とまったく同じ現象であった。

他方〔表8〕は、先の職業構成表とは別個に、ハーウィッチが「かまど税」⁽¹⁰⁾査定額を基準にして作成したウォリックシアのクエイカーの富裕度をあらわす表である。この表から明らかになることは、時期を下るにしたがってウォリックシアのクエイカーの中で貧困世帯の比率が増加すると同時に、少数の富裕な世帯もまた見られるようになること、すなわち階層的両極分解の現象が見られる、ということである。

ウォリックシアのクエイカーに関するハーウィッチの研究は、以上のように、ヴァンの見解に対していくつかの疑問を投げかける結果となったが、ヴァンは同一紙上で早速、これに対してコメントを加えている。⁽¹¹⁾第一に彼は「かまど税査定」を補助史料として利用することに賛意を表明している。しかし第二に、ハーウィッチが明らかにしたウォリックシアのクエイカーの社会層構成については、これを特殊な例としてしりぞけようとする。ヴァンによれば、ウォリックシアにはかなり数多くのクエイカー信徒が存在したにもかかわらず、そこには季会(Quarterly Meeting)が存在しなかった。それは、この州ではクエイカー派の中にジェントリーの指導性(リーダーシップ)が存在しなかったためであって、これは大変に特殊な例である、と。

〔表 9〕 ランカシアのクエイカーの職業構成 (1652—1690)

	£ 500以上	£ 100—500	£ 50—100	£ 10—50	£ 10以下	不 明	計	パ テ ー ン セ ン
農 業							163	59.5
ジェントルマン	1	6				2	9	3.3
ヨーマン	1	25	19	11	5	10	71	26.0
ハズバンドマン		14	10	26	10	23	83	30.3
食料関係の商業							23	8.4
蒸溜業者 (distiller)						1	1	0.4
麦芽酒製造者			1			2	3	1.1
製粉業者 (miller)					2		2	0.7
パン屋				1			1	0.4
雑貨商 (grocer)				1		5	6	2.2
肉 屋					1		1	0.4
タバコ屋						1	1	0.4
薬屋 (chemist)						1	1	0.4
小売店主		1				6	7	2.6
織物業							57	20.8
Mercer	1		2	1			4	1.5
Tailor		1	1		1	2	5	1.8
Weaver と Webster	1	3	1	5	2	8	20	7.3
Clothier			1			2	3	1.1
Draper				1			1	0.4
Clothmaker		1		1		1	3	1.1
革職人 (Cordwainer)	1		1	4			6	2.2
フェルト製造人				1			1	0.4
靴製造人		2		2	1	7	12	4.4
手袋製造人				1		1	2	0.7
手工業							19	6.9
車大工		1					1	0.4

石 工				1			1	0.4
皮なめし工		2		2			4	1.5
鍛造工				2	1	2	5	1.8
陶 工						2	2	0.7
皮革工				2			2	0.7
大 工			1		1		2	0.7
鉄 商						1	1	0.4
タイル職人					1		1	0.4
その他							12	4.4
水 夫		2				1	3	1.1
炭鉱夫				1			1	0.4
下男 (Groom)						1	1	0.4
不 明		1	1	5			7	2.6
計	5	59	38	68	25	79	274	

〔出典〕 A. Anderson, *op. cit.*, pp. 37-38.

ヴァンによるコメントの中で、我々のここでの問題に直接に関連する論点は以上であるが、我々は、ハーウィッチの研究の意義を次の点に求めたい。すなわち、ヴァンのテーゼをそのまま受け入れるには、いまだ早急なのであって、今後とも多くの州、地方の社会経済事情を踏まえたうえでの初期クエイカーの社会層の分析が積み重ねられなければならない、ということを確認させた、という点にある。

次に一九七九年には、ランカシア初期のクエイカーの社会層構成に関するアンダーソンの研究が現われた。⁽¹²⁾ 彼によれば、ランカシアでは「かまど税」の脱税が広範囲にわたって行われたので、「かまど税」査定簿はクエイカーの社会層の確定のためには不適切である。そこで彼は、ヴァンと同じように、結婚登録簿、受難資料⁽¹³⁾および「表10」はアンダーソンの研究の結果を示すもので、いずれも縦軸には職業名、横軸には年間所得額の幅が示される。

〔表10〕 1665年以前のランカシアのクエイカーの職業構成

	£500以上	£100—500	£50—100	£10—50	£10以下	計	パー セン テ
農 業						66	86.8
ジェントルマン	1	2				3	3.9
ヨーマン		17	5	5	1	28	36.9
ハズバンドマン		5	9	16	5	35	46.1
食料関係の商業						3	3.9
肉 屋					1	1	1.3
製粉業者					1	1	1.3
靴製造業者						1	1.3
織 物 業						6	7.9
Clothier		1		1		2	2.6
Mercer			1			1	1.3
Tailor		1	1			2	2.6
Weaver					1	1	1.3
手 工 業						1	1.3
皮なめし工						1	1.3
計	1	28	16	22	9	76	

〔出典〕 A. Anderson, *op. cit.*, p. 38.

ランカシアにおけるクエイカリズムの初期全体についての職業構成をあらわした「表9」から明らかになることは、第一に「初期クエイカーたちがおもに社会の中産的諸階層 (the 'middle ranks' of society)、すなわち独立した土地所有者と商人、および繊維産業⁽¹⁴⁾から引き出された、ということである。したがって、アンダーソンの研究成果は、一方で、「初期フレンズは、おもに都市と農村のプチ・ブル層から引き出された」とするコウル⁽¹⁵⁾の見解を批判するとともに、他方では、興隆期クエイカー派における小ジェントリーや Wholesale Traders の比率の高さを強調するヴァンの見解をも批判する結果になっている。

第二に、ヴァンが問題にした、王政復古期におけるクエイカー派の社会層構成の変化については、「表9」と「表10」を対照させることによって、ランカシアにおけるそれを明らかにすることが出来る。「表10」は「表9」にあらわれる二七四名のクエイカーのうちで一六六五年までにクエイカーになっていた七六名にかなする表である。両者を比較してみると、「表10」における富裕なクエイカーの割合が「表9」におけるよりも大きいことは一目瞭然である。すなわち、アンダーソンの研究成果は、ヴァンの第二の論点、すなわち「一六七〇年以降の帰依者は、興隆期の帰依者よりも一般的により低い社会層に属していた」という論点を支持するものになっている。⁽¹⁶⁾

第三に、アンダーソンは初期クエイカーの社会層構成を分析するために、彼等の職業構成を調査したばかりでなく、彼等の年収の推定値をも調査した。その結果、同一の職業内での貧富の幅が、かなり大きいことが判明した。例えば、同じハズバンドマンのカテゴリーの中には、年収数百ポンドの富農から年収十ポンド以下の極貧農まで含まれているのである。したがって、従来の職業分析のみによって社会層を確定するという方法は、きわめて不充分である、ということがわかる。この事実を明らかにしたということが、研究史上におけるアンダーソンの重要な貢献の一つである。

初期クエイカーの階層構成に関する最新の研究は、バリー・レイによるものである。⁽¹⁷⁾ただし彼が対象とするのは、

一六六四年以前にクエイカーになった者のみである。彼は、過去の研究史を検討したうえで、第一に史料中の職業記載をそのまま利用するのではなくて、厳密な社会層のカテゴリーを設定しているという意味で、第二に広範囲の史料群を検討することによって、個々のクエイカーの社会層を明らかにしているという意味で、ヴァンの方法を最良のものとする。ただしヴァンの社会層カテゴリーの設定の仕方に、レイは若干の修正を加える。⁽¹⁸⁾まず農業関係であるが、レイはヨーマンという語を法的に厳密な意味⁽¹⁹⁾ではなく、同時代の一般的用法、すなわち、ジェントルマンより下層のステイタスの富裕な農民（自由保有農ばかりでなく、慣習保有農や定期借地農を含む）を意味する語として理解する。

〔表11〕 1663年以前のクェイカーの社会層構成

	チェンア		エセックス		コルチェスター		サマシット	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
ジェントリー	5	3.2	3	2.5	4	13.3	0	0
専門職	2	1.3	0	0	1	3.3	0	0
農業関係	92	59.7	67	55.4	0	0	105	72.4
ヨーマン	33	21.4	35	28.9	0	0	39	26.9
ファーマー	34	22.1	21	17.4	0	0	33	22.8
ハズバンドマン	25	16.2	11	9.1	0	0	33	22.8
Wholesale Traders と大規模生産者	5	3.2	19	15.7	13	43.3	14	9.7
Retail Traders	23	14.9	14	11.6	6	20.0	12	8.3
手工業者 (Artisans)	20	13.0	14	11.6	6	20.0	9	6.2
労働者と召使い	7	4.5	4	3.3	0	0	5	3.4
計	154		121		30		145	

〔出典〕 B. Reay, *op. cit.*, pp. 224-227.

同様にハズバンドマンというカテゴリーは、ヨーマンより下層のステイタスの小土地保有農を意味するものと理解される。また、農業をおもな生業としていることは確かでも、そのステイタスが不明な者はファーマーとして分類される。

次に職人 (artisan) と労働者 (labourer) はヴァンによつて一括して取扱われるが、レイは、職人という階層の中にはかなり富裕な者も含まれるという理由から、両者を別個の社会層として区別する。

またレイは、大規模な生産者を Wholesale Traders と共に一括して一つのカテゴリーに含める。その理由は、当時は大規模生産者例えば毛織物の織元 (Clothier) の多くがみずから商取引をも行っていたからである。

このようなカテゴリーの設定を前提にしてチェンア、エセックス、コルチェスター、サマシットの一六六四年以前のクェイカーについてレイが行った調査の結果は「表11」に示される。⁽²⁰⁾更にレイは、これ

〔表12〕 Reay の集計結果と Vann の集計結果の比較

	Cheshire	Essex	Colchester	Somerset	Bucks	Norfolk	Norwick
ジェントリー	3.2	2.5	13.3	0	7.3	7.4	6.3
専門職	1.3	0	3.3	0	3.6	1.9	0
農業関係（ジェントリーを含む）	63.0	57.9	0	72.4	45.5	35.2	0
ヨーマン	21.4	28.9	0	26.9	27.3	20.4	0
ファーマー	22.1	17.4	0	22.8	5.5	0	0
ハズバンドマン	16.2	9.1	0	22.8	1.8	5.5	0
労働者と召使い	0	0	0	0	7.3	5.5	0
Wholesale Traders	3.2	9.1	20.0	4.8	25.5	18.5	12.5
Retail Traders	14.9	11.6	20.0	8.3	16.4	11.1	18.8
Weavers, Woolcombers, Clothiers	5.2	9.1	40.0	6.2	0	16.7	43.8
手工業者	7.8	9.1	3.3	4.8	9.1	16.7	18.8
労働者と召使い	4.5	3.3	0	3.4			

〔出典〕 Reay, *op. cit.*, p. 229.

をバッキンガムシア、ノーファクおよびノリッジについてのヴァンの調査結果と比較するために〔表12〕を作成する。⁽²¹⁾〔表12〕中の数字はすべてパーセンテージである。〔表12〕を見ると、レイの調査結果に現われるヨーマンの比率は、ヴァンのそれにおけると同様に20%台の高率を示している。しかし、両者の表のその他のカテゴリーにおける比率には大きな相違がある。まず、レイの表におけるジェントリーの比率はヴァンのそのの半分に満たない（例外はコルチェスター）。次に、レイの表における Wholesale Traders の比率もヴァンのそれにおける比率よりもずっと低い（例外は同じくコルチェスター）。第三に、レイの表におけるハズバンドマンの比率はヴァンのそれにおける比率よりもずっと高い。この両者の相違は何に由来するのだろうか。ヴァンとレイのいずれかが史料判別の上で歪曲を行って

いる、とはまず考えられないから、この両者の相違は地域的な相違を示すのであろう。要するに、バックingham やノーファクの興隆期クエイカーの社会層構成においてはジェントリー、ヨーマンおよび Wholesale Traders の比率の高さが顕著であるのに対して、チェシア、エシックス、サマシットシアでは、ヨーマン、ハズバンドマンおよび Retail Traders の比率の高さが目立つのである。⁽²²⁾ このように興隆期クエイカー派の社会層構成にはかなり顕著な地域的な相違があることが明らかになったのではあるが、それでは興隆期クエイカー派の担い手の社会層を、全体としてどのように規定できるのだろうか。もちろん、その解答は興隆期クエイカーの社会層構成についての他の諸地域に関する研究がもっと進展しなければ提示され得ない、とするのが歴史家としての正しい態度であらう。我々は、最終的には実証的な調査の成果が完備される日を待たねばならない。しかし理論的な根拠から、我々は、ヴァンが対象とした地域における社会層構成が、むしろ例外的なものだ、と予想する。⁽²³⁾ 何故か。

それは一言で言えば、興隆期クエイカー派の社会思想の内容が、ヴァンが想定する興隆期クエイカー派の社会層構成の特徴と適合しないからである。興隆期クエイカーの政治・社会思想に関しては、すでに多くの研究者たちの労作によって詳細にいたるまで研究し尽されている。もちろんクエイカー運動は宗教運動なので、興隆期クエイカーは政治・社会綱領を持たなかった。そして政治・社会的改良を唱える彼等のトラクツの中には様々の要素(平等派的、ディッガーズ的、第五王国派的、あるいは共和派的な諸要素)が混入しており、それを単純な図式で説明することは不可能である。しかし、興隆期クエイカーが提唱する政治・社会的改良の基礎には、一定の政治的・社会的な認識の共通項が見られることもまた、明らかである。まず、政治的認識について言うと、彼等は内戦の勃発については議会派の大義を支持し、大空位期(一六四九―一六六〇年)の政治過程についてはグランディーズ(クロムウェル等のお偉方)を批判し、王政復古を革命陣営の欺瞞に対する神の懲罰としてとらえる。要するに、彼等の視座は、内戦を戦い抜いたが、共和制成

立後クロムウェル等の反動によって裏切られていく議會軍の兵卒の立場からのものである。また、彼等の社会的認識は、貴族およびジェントリー、国教会、法曹界という同一の根から成る三勢力が社会的不平等の体制を作り上げ、これを支えている、というものであった。興隆期のクエイカーたちはこのような社会に、いわば「精神革命」を起して、平等な社会を建設しようとした。このような社会的な認識は基本的に中産生産者および小生産者の認識だ、と言えよう。⁽²⁴⁾したがって、もしもヴァンがバックinghamシア、ノリッジおよびノーファークにおける調査にもとづいて提出した仮説、すなわち、興隆期クエイカーは小ジェントリーから全くの不熟練労働者まで広がるすべての社会層からその帰依者をひき出したけれども、その中核はヨーマン層と Wholesale Traders であり、これら二階層およびジェントリー層から指導者層が現われた、という仮説が興隆期クエイカー全般についても妥当するとすれば、興隆期クエイカーの政治・社会思想の由来の説明がまったく不可能になってしまふのである。⁽²⁵⁾このような理由から、我々は、興隆期クエイカー全般の社会層構成が、いくつかの州についてアンダーソンとレイによって明らかにされた社会層構成に近いものになるだろうと予想し、研究史上の現段階において、アンダーソンおよびレイの研究成果を積極的に支持するのである。

以上、私は初期クエイカーの社会層構成についての研究史の要点を、その流れに即して紹介してきたが、その流れはけっして単純に直線的なものではなかったので、ここで、研究史の論点を再整理しよう。

第一に、研究のための史料が出来るだけ広い範囲から収集されるべきことは、当然である。ヴァンの研究は、この意味で後続の諸研究の模範となったもので、彼の史料収集の範囲は、クエイカー派教団内の諸史料（宣教者の活動の記録、⁽²⁶⁾迫害による受難の記録、⁽²⁷⁾結婚、出生、死亡の登録簿、⁽²⁸⁾教会諸業務集会の議事録など）ばかりではなく、世俗裁判所記録（四季裁判記録など）や、宗教裁判所記録（遺言書、審問記録など）や教区登録簿などにまで及んでいる。出来るだけ広範囲の

史料を調査することは、個々のクエイカーの職業、生活水準、社会層を出来るだけ正確に確定するために、不可欠である。例えば、A・コウルの研究は結婚登録簿をほとんど唯一の情報源としているため、A・アンダースンによって指摘されたように、ランカシアの数名のジェントリー・クエイカーを見落しており、彼の調査結果は現在ではまったく信憑性を失ってしまった。研究において調査されるべき史料の範囲は、ハーウィッチの提唱によって、更に「かまど税」査定簿にまで拡大された。ただし、「かまど税」査定によって明らかになるのは、個々の家計の大まかな規模だけであり、その史料としての価値は「補助的」である。⁽³⁰⁾

第二に、このように、出来るだけ広範囲の史料群を検討して作成された個々のクエイカーについてのデータを基礎にして、我々は初期クエイカー派の社会層構成を検討するわけだが、その際、生の史料に現われてくる職業名を並べて「職業構成表」を作成するだけでは、クエイカー派の社会的性格を十分に把握することは出来ない。R・T・ヴァンは、例えば商工業における Wholesale Trader と Retail Trader⁽³¹⁾ というような社会層カテゴリを設定することによって、「職業構成表」よりは一段と抽象度の高い「社会層構成表」を作成した。レイは更にヴァンの社会層のカテゴリに若干の修正を加えることになる。ヴァンとレイの社会層構成表は、初期クエイカー派の社会層構成を認識するうえで、かなり有効ではあるが、しかし、いまだに二つの問題が未解決である。一つは、A・アンダースンの「表9」によって提起された問題である。彼はランカシア・クエイカーの職業構成と所得分布の両方を調査したのだが、その調査結果によると、同一の職業に従事する者たちのあいだに、所得水準の大きな隔差があることがわかる。例えばB・レイの「表11」では、織布工 (Weaver or Webster) は一括して手工業者 (Artisans) という社会層のカテゴリの中にまとめられているけれども、その中には年収五〇〇ポンド以上の、従って手工業者というカテゴリの中には入らないような者が含まれてしまう可能性がある。

ここから、もう一つの問題が生じる。例を先ほどの織布工にとるならば、一言で織布工と言っても、当時その中には、独立した手工業者としての織布工、マニユファクチュア企業者に雇用された作業場内労働者、問屋制前貸資本の支配下にある織布工という、それぞれ社会的諸生産関係の中で異なった位置を持つ三つのカテゴリーが含まれていた。また、年収五〇〇ポンド以上の「織布工」は、ステイタス（階層）のうえでは織布工であっても、その現実の社会・経済的存在は、むしろ問屋制織元あるいはマニユファクチュア企業者であったのだらう。⁽³²⁾ また、農業部門についても、個々の土地ジェントリーが、寄生地主であるのか、手作り地主（耕作地主）であるのか、近代的地主であるのか、更に、ヨーマン、ファーマー、ハズバンドマンと標記される農民が、独立した自営農なのか、あるいは定期借地農なのか、資本家的借地農なのか、あるいはむしろ農業労働者に近い存在なのか、そしてまた、彼等が農村工業を兼営していたのか、否か、という問題は、初期クエイカー史の社会経済史的背景がいわゆる「ブルジョワ革命」⁽³³⁾（イギリスについては、ピューリタン革命と名譽革命を含む）にあたるからこそ、大変重要であらう。もしもこのようにして個々のクエイカーが生産諸関係の中で占める位置が明らかになるならば、我々はそれらのデータを利用して、社会経済史的な背景を念頭においた「階級構成表」を作成することが出来るだらう。もちろん、個々のクエイカーが生産諸関係の中で占める位置が明らかになるケースは、実際にはごくまれにしか存在しないだらう。しかし、初期クエイカーの社会層構成を研究してきたこれまでの研究者たちが、その社会経済史的な理論的背景に注意を払うことが大変少なかったように思えるので、私はあえてここで、我々の最終的な目標を示したのである。

以上のように初期クエイカーの社会層構成の問題は、今後とも実証的にも理論的にも深化されなければならないのだが、現状においては我々は、興隆期クエイカーの社会層構成については、A・アンダーソンおよびB・レイによつ

て唱えられた説を支持する。すなわち、興隆期クエイカリズムは、小ジェントリーから全くの不熟練労働者にいたる広範囲な諸階層からその信徒を得たが、その主要な担い手は農村と都市の中産的社會層（ヨーマン、ファーマー、および Retail Traders、手工業者）であった。もともと、地域的な偏差も明らかに見られるのであって、ノーファクやバッキンガムシアでは、ジェントリーや Wholesale Traders の比率が高く、ウォリックシアでは、逆に、ジェントリーがほとんど皆無に等しい。また、興隆期クエイカー運動は基本的に農村の運動であつたが、ノリッジ、コルチェスターおよびプリストル⁽³⁴⁾といった都市におけるクエイカー派の社會層は、農村部におけるよりも、上層部に属する人々の比率が高い。

それでは、王政復古期のあいだにクエイカー派の社會層構成にはどのような変化が見られるのだろうか。これまでにこの問題に取り組んだ研究者は R・T・ヴァンと J・J・ハーウィッチと A・アンダーソンだけである。三者は前にも述べたように、興隆期クエイカー派の社會層構成についてその見解を異にしているけれども、王政復古期における社會層構成については、一致して「一六七〇年以降の帰依者は、興隆期の帰依者よりも一般的により低い社會層に属していた」と結論している。したがって我々は、現段階において、ヴァン、ハーウィッチおよびアンダーソンの説を支持しよう。では何故、このような社會層構成の変化が起つたのだろうか。ヴァンとアンダーソンの調査結果を見ると、ジェントリーや Wholesale Traders の絶対数は、この期間を通じて減少して⁽³⁵⁾いない。したがって、このような社會層構成の変化は、ハズバンドマン、農業労働者、Retail Traders、手工業者などの下層の人々が大量にクエイカー派に帰依したために起つたのである。我々は本章第 A 節において、クエイカー信徒数が王政復古以後も増加の一途をたどり、一六八〇年代に頂点に達することを確認したが、増加した信徒数の大部分は、中産下層および下層大衆から成っていた。では、何故それらの社會層の人々がクエイカー派にひきつけられたのであろう。その理由は、私見に

よれば、王政復古期に教会組織を通して運用されたクエイカー派の互助制度と救貧制度が、⁽³⁶⁾これらの社会層の人々にとって大変魅力的であったためである。

次に我々は、後期クエイカー派の社会層構成を検討しよう。しかし前述のように、十八世紀のクエイカー派の社会層構成の分析に役立つデータは、ほとんどまったく存在しない。我々が持っている唯一のデータは、ボールとベックが作成した、一六八〇年頃と一七八〇年頃のロンドンのクエイカーの職業構成を対照させた「表13」である。⁽³⁷⁾この表にはいくつかの難点がある。第一に、この表は一六八〇年頃にロンドンの諸月会で結婚したクエイカーの新郎二五〇名の職業を、一七八〇年頃の二五〇名のそれと対照させたもののだが、ボールとベックが作成した別の表⁽³⁸⁾によると、ロンドンおよびミドルセックスにおいては一六八〇年から八四年のあいだに二八七件の結婚があったが、一七八〇年から八四年のあいだには九一件の結婚しかなかった。後者の年数の幅を一七七〇年から一七八四年に広げれば、結婚件数は二四九件になるが、それでも、正確に二五〇という数字は出てこない。要するに、この表は年次や数字について大変いいかげんな統計表なのである。そして、年次や数字について不正確な表というものは、そもそも統計表としての意味を成さない。「表13」の第二の難点は、いろいろな職業のグルーピングに一貫した視点がないことである。例えば、農業関係のヨーマン、ファーマー、ハズバンドマンが、統計表の上段、中段、下段に何の関係もなく、ばらばらに現われている。また他方では、金匠、穀物商、馬具商、といった諸職業が一括されている。以上のように、「表13」は、きわめて利用・加工し難く、信頼し難い統計表ではあるが、この表でもってボールとベックが証明しようとした事実が何であったのか、は明らかである。すなわち、二人は、ロンドンに住むクエイカーの社会層構成が一世紀間に変化して、より富裕な諸階層に属する信徒の割合が増加した、ということを示したかったのである。前述し

〔表13〕 ロンドン・クェイカーの職業統計表

職	業	1680年頃	1780年頃
銀行家		0	7
貿易商人		14	20
セールスマン、倉庫業者、波止場管理人		1	7
醸造業者、醸留業者、ブドウ酒商		7	6
ブドウ酒卸商、酒屋店主、タバコ商、タバコ刻み人		2	5
教 師		5	2
ヨーマン		0	1
外科医、医師		0	6
株式仲買人、金融業者、土地調査人		0	4
金匠、銀匠、建築業者、鋳物師、石炭商、粗粉卸商、麦芽商、小麦卸商、皮はぎ人、皮革商、馬具商、皮革裁断人、穀物商、製粉業者、粗粉卸兼小売商		8	41
製造業者、染物師、なめし皮業、なめし皮仕上人、石鹼業者、製糖業者、キャラコ捺染業者、ロウソク製造兼販売商、コルセット製造人		2	22
化学者、薬剤師、香料商、印刷業者、書籍商		1	9
版木製造人、ブリキ工、家具商、家具師、時計工、エナメル工		4	13
帽子商、毛織物商、織元、小売商、既製服商		0	17
種子商、ファーマー、草花栽培者		0	5
しんちゅう細工師、刃物師、鉄商、しろめ器物製造職人、錫細工師		10	11
肉屋、パン屋、荒物屋、糖菓業者、雜貨商、チーズ商		21	13
メリヤス商、手袋商、小間物商、リンネル生地商、絹加工業者、絹織物商		12	12
木製品商、簾細工人、靴屋		8	6
牧牛業者、ハズバンドマン		5	3
めがね造り、器具製造人、木ぐつ製造人、薬味入れ造り、柱時計職人		16	3
羊毛商人、つや出し工、梳毛工、梳毛機製造人、撚糸工、フェルト製造人、布地加工業者		12	5
金属加工業者、木挽き、鍛冶工、指物師、木ずり造り、ろくろ師、大工、桶屋、縫帆工、船大工、船鍛冶工、帆柱造り、車大工		29	9
煉瓦積工、煉瓦工、石工、左官		9	0
水 夫		10	0
織布工、生糸撚糸工、羊毛選別工		19	4
靴修繕工、裁縫師		39	5
料理人、醸造業者の下働き、かつぎ人夫、労働者、船頭		8	0
職種無記入の者		8	13
計		250	250

〔出典〕 W. Beck and T.F. Ball, *op. cit.*, p. 90.

たいくつかの難点にもかかわらず、「表13」は、この事実を一応証明し得ている、と考えられる。ただし、そのような変化が、一六八〇年ごろのクエイカーの子孫がそのまま階級上昇したために起ったのか、あるいは、零落したクエイカーは地方へ移住して、成功したクエイカーがロンドンに集ってきたために起ったのか、あるいはまた両方の原因がからみあっているのか、という点は不明である。更にまた、一世紀間のロンドンのクエイカーの社会層の上昇傾向を、クエイカー派の全国的な社会層構成における変化の傾向と同一視することも出来ない。ただし、十八世紀中にクエイカー派の中から多くの成功した企業家や商人が現われて、クエイカー派の社会層構成が全般的に上昇した、ということについては、多くの同時代の証言がある。⁽³⁹⁾しかし、その事實は、いまだに統計資料で証明されたことがない。そして、「表13」も、それを充分に証明し得るほどの統計資料ではないのである。⁽⁴⁰⁾

次に十九世紀のイギリス・クエイカー派の社会層構成について検討しよう。十九世紀のイギリス・クエイカー派の社会層構成に関する研究も、これまでのところ、ほとんど進展していない。もちろん世紀の前半については、統計データそのものが著しく不備なのだから研究が進展しないのも当然だが、福音主義者がイギリス・クエイカー派の主流を占めるようになる世紀の後半においては、統計データが完備されてくるのだから、この時期についての研究が進展していないのは、従来のクエイカー史家の怠慢の結果としか言いようがない。

E・インチェイによれば、十九世紀後半の社会層構成を知るための最も包括的な史料は、一八五一年以降行われた国勢調査の調査員が記した莫大な手稿本の調査簿である。しかし、この史料は地域ごとに整理されており、誰がクエイカーであるかを明示していないので、一八五一年におけるクエイカー教徒全員の正確な住所が確認できなければ、この史料から、当時のクエイカー派の社会層構成を知ることが出来ない。そして残念なことには、この時点でのクエイカー教徒の正確な住所を確認することは、ほとんどまったく不可能なのである。⁽⁴¹⁾

〔表14〕 死亡登録摘要によるクェイカー派の社会層構成

1840—41 1870—71 1900—01

	職 業 名	N	%	N	%	N	%
I	ジェントルマン	27		49		20	
	製造業者、鉱山所有者、炭坑所有者、石切場所有者、船舶所有者	8		7		13	
	銀行家、株式仲買人、保険会社の支配人	6		1		5	
	専門職	16		14		10	
	貿易商人 (merchant)、出版業者	16		14		12	
	土地所有者 (land owner)	28		26		2	
	代理人 (土地、保険、その他の)	4		2		2	
	醸造業者、麦芽製造業者、製粉業者、製革業者、印刷業者	6		5		6	
	経営者 (managerial)	1		0		2	
	船 長	0		0		1	
	その他	0		0		4	
	社会層 I の小計	112	50	118	60	88	44
II	小売店主、小企業家	39		12		21	
	外交セールスマン	1		2		5	
	独立した職人	13		8		12	
	教 師	4		3		4	
	書記、帳簿係	1		3		6	
	職長、監督人、農場管理人 (bailiff)、小経営者	0		1		9	
	宣教師	0		0		4	
	宿屋の主人、その他	1		3		0	
	社会層 II の小計	59	26	32	16	61	30
III	小売店の助手	1		3		5	
	熟練労働者、半熟練労働者	34		27		23	
	社会層 III の小計	35	16	30	15	28	14
IV	不熟練労働者	7		12		10	
	農業労働者	6		1		2	
	水 夫	3		1		2	
	社会層 IV の小計	16	7	14	7	14	7
	不詳 (鉄工業主、機械製造業者、エンジニア、その他)	2	1	4	2	11	5
	退職者および不明	140	—	150	—	35	—
	総 計	364	100	348	100	237	100

〔出典〕 E. Isichei, *op. cit.*, pp. 288-291より作成。

十九世紀クエイカー派の社会層構成を知るために利用できる第二の史料群は、クエイカー派の教団内部の登録文書類——出生登録、結婚登録、死亡登録——である。⁽⁴²⁾これらの登録文書には、事件の当該者あるいはその家族（父母あるいは子）の職業が記載されている。E・イシチェイは、これらの登録文書類のうち「死亡登録摘要」（The Digests of Deaths）に記された職業名を利用して、十九世紀の三つの時点（一八四〇—四一年、一八七〇—七一年、一九〇〇—〇一年）におけるクエイカー派の社会層構成を明らかにする。これが「表14」である。もちろん、産業革命を経たのちのイギリスの全人口の社会層構成は十七世紀の社会層構成とまったく異なるのだから、十九世紀のクエイカー派の社会層構成を検討するときには、十七世紀後半のそれを分析する際に用いられた社会層のカテゴリーとはちがったカテゴリーを設定する必要がある。「表14」においてイシチェイが用いる諸カテゴリーは、十九世紀後半から二〇世紀前半に至る時期のイギリスの製鋼業者の出身社会層を分析するためにC・エリクソンが設定した諸カテゴリーと同一のものである。⁽⁴³⁾すなわち、第一社会層は「専門的ならびに高級管理的」職業および「管理的ならびに行政的」な職業から成る。言い換えれば、ここに含まれるのは、地方の名望家的支配者たるジェントルマン、企業家、経営者、自作農、資本家的借地農および専門職であり、ここには社会のいわゆる上流階級と中流階級が含まれている。⁽⁴⁴⁾他方、第二・第三・第四社会層は中流下層および下級階級の人々ということになる。そのうち第二社会層には「検査、監督その他の（上級および下級の）手仕事のでない」職業と、四名以下の労働者を雇用する企業家、商店主、独立した職人、その他が含まれ、その中核をなすのは、いわゆるホワイト・カラーである。また、第三社会層には小売店の助手（売子）、熟練・半熟練労働者が、第四社会層には、不熟練労働者、農業労働者、その他が含まれる。

「表14」から明らかとなるクエイカー派の社会層構成の特徴は、第一に、それが十九世紀をとおしてあまり変化していないことである。もちろん、第一社会層と第二社会層においては、三つの時点をとおして若干の変化が見られる

が、サンプルの数そのものが少ないのだから、その変化はほとんどネグリジブルである。十九世紀クエイカー派の社会層構成の第二の特徴は第一、社会層の比率が異常に高いことである。このことは、「表14」におけるクエイカー派の社会層構成を、十九世紀イギリスの全人口の社会層構成と比較することによって明らかになるであろう。

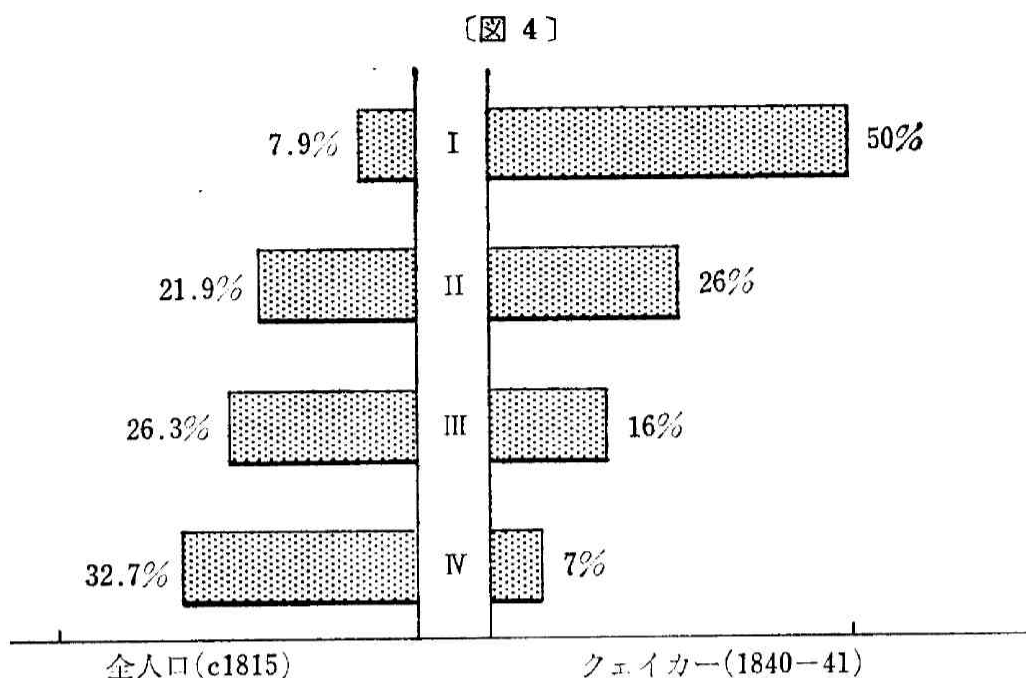
ところで、十九世紀イギリスの全人口の社会層構成を明らかにすることは、実は、大変困難である。まず、一八五一年の国勢調査によって集計された職業統計⁽⁴⁵⁾をはじめとする十九世紀のいくつかのセンサス統計から社会層構成を析出するのは、不可能である。これらの職業統計には、二つの大きな制約がある。第一には、例えば製鉄業 (Iron Manufacture) が一つの職業として一括してとらえられていて、その中の企業者、管理職、熟練労働者、不熟練労働者のそれぞれが絶対数が不明である。第二に、職人的な職種については、それが独立した経営を営む職人なのか、あるいは企業に雇用された熟練工・半熟練工なのか、という区別が明示されていない。したがって十九世紀のセンサス統計は、どのような職業に何人の人間が、従事しているかという職業構成を明らかにしているだけであって、これら的加工して社会層構成あるいは階級構成を析出することは出来ない。

しかし我々は、善後策として、十九世紀当時の統計学者たちの研究を利用して、イギリスの全人口の社会層構成を推測することが出来る。まず「表15」⁽⁴⁶⁾は、パトリック・カフーン (Patrick Colquhoun) が集計した一八一五年頃のイングラントの職業構成のピラミッド⁽⁴⁶⁾を加工して作成した社会層構成表である。この表によると、全人口に対する第一社会層の占める割合は五・三%、第二社会層の占める割合は二四・五%、第三社会層の占める割合は二六・三%、第四社会層の占める割合は三二・七%、である。ただし、カフーンのグルーピングによると製造業者 (manufacturers) は第二社会層に含まれるので、第二社会層中の四五万人がすべて製造業者であると仮定して (もちろん、そういうことはあり得ないが)、これを第一社会層の中に入れると、第一社会層の割合は七・九%、第二社会層の割合は二一・九%とな

〔表15〕 カフーンの統計による1815年ごろのイングランド全人口の社会層構成

	職 業 名	千 人	%
I	王族と貴族	3	5.3
	準男爵・騎士・スクアエア	50	
	上級僧職者・貿易商人と銀行家・上級文官と法律家	40	
	独立したジェントリー	150	
	上級の医者とその他の専門職	20	
	陸軍と海軍の将校	70	
	下級僧職者	75	
	上位の自由保有農	300	
	船舶所有者・下位の商人・造船業者・エンジニアと建築業者	200	
	社会層Iの小計	908	
II	下級専門職・文官・非国教徒の牧会者	250	24.5
	宿屋の主人	375	
	小売店主と行商人	600	
	独立した職人と製造業者	450	
	下位の自由保有農	900	
	借地農（ファーマー）	1,300	
	教師・俳優・書記・小売店の店員	320	
	社会層IIの小計	4,195	
III	手工業とその他の熟練労働者	4,500	26.3
	社会層IIIの小計	4,500	
IV	農業労働者・鋳夫・不熟練労働者・水夫	3,500	32.7
	召使い	1,300	
	水兵と兵士	800	
	社会層IVの小計	5,600	
被救恤民・浮浪者・囚人・狂人		1,900	11.1
総 計		17,103	99.9

〔出典〕 Ch. Cook and J. Stevenson, *op. cit.*, p.145 より作成。



る。

このように、イングランドの全人口の中で第一社会層の占める割合を意識的に大きく見積つたとしても、それは一〇%を超えることはあり得ない。ところが十九世紀クエイカー派においては、その割合は四〇%から六〇%なのである。〔図4〕は〔表14〕中の一八四〇—四一年のクエイカー派の社会層構成と、〔表15〕の社会層構成に修正を加えたもの、とを、棒グラフにして対照させたものだが、一見して明らかに、両者の社会層構成はまったく逆の分布状況を示しているのである。

我々は今、十九世紀イギリスの社会層構成をカフーンの職業統計表から推定したのであるが、十九世紀イギリスのミドル・クラスの割合が数パーセント程度にすぎないということは、他の統計的研究からも明らかに出来る。例えば、一八六七年のイギリスの国民所得統計を算定したダッドリー・バクスターによれば、中産階級以上の人々が全人口のうちで占める割合は二三・三%であるが、彼はC・エリクソンのいわゆる第二社会層(Lower Middle Class)をも中産階級の含めてしまっている、この第二社会層(全人口のうち約一八%〜一九%)を除くと、ミドル・クラス以上の人々が全人口のうちで占める割合は、四な

いし五%になる⁽⁴⁷⁾。そしてまた、十九・二〇世紀交の時期以降になると、エリクソンのいわゆる第一社会層と第四社会層の全人口に対して占める割合が減少し、第二社会層と第三社会層の占める割合が上昇するということも、やはり周知のことがらに属する⁽⁴⁸⁾。

以上、我々は十九世紀イギリス・クエイカー派の社会層構成を、当時のイギリスの全人口の社会層構成との対比のうで検討してきたのであるが、結論として我々は、十九世紀のクエイカー派の社会層構成が全人口の社会層構成とは対照的に逆ピラミッドの形を示しているという事実を確認できる。もともと、我々が依拠したインチェイの統計におけるサンプル数は、全クエイカー人口に対して非常に少ないので、十九世紀のクエイカー派の社会層構成についての研究もまた、今後とも進展させなければならない。しかしながら、エムデンやレイストリックのクエイカー企業者史研究⁽⁴⁹⁾に接したことのある人ならだれでも、十九世紀のクエイカリズムがミドル・クラスすなわちブルジョワジーの宗教になっていたことを認めないわけにはいかないだろう⁽⁵⁰⁾。

最後に本節のまとめを行おう。

興隆期クエイカリズム（一六五二—一六六〇年）は、「宗教的興奮はまさにあらゆる身分的・階級的な諸社会層を突き抜いて進むから⁽⁵¹⁾」、貴族やまったくの不熟練労働者をのぞくあらゆる諸社会層から、その担い手をひき出した。しかしその中核部分は、中産的諸社会層なのであって、レイストリックやコウルが主張するように中産下層ではなく、また、ヴァンが主張するように中産上層なのでもなかった。しかし、王政復古期（一六六〇—一六九〇年ごろ）における新たな帰依者の大部分は中産下層の大衆であり、このことがクエイカー派の社会層構成を変化させることになった。しかしながら十八世紀のクエイカリズムの「静寂主義」の時期においては、王政復古期とはことなっていたいろいろな動

きが働いて、クエイカー派の社会層構成を別の意味で変化させることになった。この間の事情については統計的史料が存在しないのではあるが、十九世紀のクエイカー派は典型的にブルジョワ的諸社会層に担われた宗派になっていたのである。

最後に一つの問題が残る。王政復古期には多数の中産下層の人々が参入して、クエイカー派の社会層構成はピラミッド型に近くなったのに、何故十九世紀においてはクエイカー派の社会層構成は逆ピラミッド型を呈するようになったのか。その解答の一部は、全国的な教会組織を通して上から信徒たちに浸透させられたクエイカー派の職業道徳に求められる⁽⁵²⁾。十八世紀イングランドは、経済史の観点から言うと、いわゆるマニユファクチュア期と産業革命の前半期にあたるのであって、この時期には周知のように、一介の職人や小商店主が大企業主や大商人に階層的上昇をとげるチャンスは大きく開けていた。このような状況の中で、正直、几帳面、節約、勤勉といった徳目を自己の生活を合理的に律しながら実践していったクエイカー教徒の多くが、階層的上昇をとげていったことは、想像に難くない。

しかし、そのことは事態のすべてを説明し尽せるものではない。我々はここで、十八世紀のあいだにイギリス・クエイカー派の信徒数が約三分の一に減少（六万人から二万人に）した、という事実との関連で、この問題を考えるべきだろう。前に述べたように、クエイカー派信徒数の減少の最大の理由は、破門の執行と信徒のアメリカへの移住の二つである。これら二つのうち破門の執行は、必ずしもクエイカー派の社会構成を変化させる性質のものであったとは考えられない。というのは、破門の理由となったのは *mixed-marriage* や破産や不品行であったのだが、それらは必ずしも下層の信徒のみが犯した過ちであったとは考えられないからである。しかし、アメリカへの移住については事情がちがう。イギリスにおいて社会的に成功している人々が何故わざわざアメリカへ移住するだろうか。現在のところ、私の手許にはそれを実証すべきデータはないのだけれども、アメリカへ移住したクエイカー信徒の大部分は貧し

い信徒であった、と推測⁽⁵⁸⁾できる。以上のように、十八世紀のあいだにイギリス・クエイカー派の社会層構成をドラスティックに変化させた主要な要因は、教会組織を通じての職業倫理の上からの浸透による一部の信徒の階級上昇、および貧しい信徒、あるいは零落した信徒のアメリカへの大量の移動、の二つである、と私は考える。

- (1) 拙稿「初期クエイカーの階級構成について」『二橋研究』第三号、一九七二年、および拙稿「プリストルのジョージ・ビショップについて(2)」『経済貿易研究』第八号、一九八一年を参照せよ。
- (2) W. Beck and T.F. Ball, *The London Friends' Meetings*, London, 1869, p.90; E.E. Taylor, *The Valiant Sixty*, London, 1947, pp. 39-75; A. Raistrick, *Quakers in Science and Industry*, London, 1950, pp. 27-32.
- (3) 七つの地域とは、ランカシア、グロスターシア、ウィルトシブ、プリストル、ロンドン、ミドルセックスである。これらの結婚登録簿も、現在はロンドン Friends House Library に所蔵されている。
- (4) Alan Cole, 'The Social Origins of the Early Friends' in *Journal of the Friends' Historical Society*, Vol. LXVIII, 1957, p.117.
- (5) Richard T. Vann, *The Social Development of English Quakerism 1655-1755*, Cambridge, Mass., 1969, p. 73.
- (6) ヴァンは商工業者 (Traders) を、その平均的年収や創業に必要な資金額などを基準にして、Wholesale Trader と Retail Traders の二つのカテゴリーに分ける。前者には毛織物工業の織元 (clothiers, drapers, mercers) や貿易商人 (merchants) や製粉業者 (millers)、製革業者 (tanners)、麦芽製造業者 (malsters) などが含まれ、後者にはその他の商工業者が含まれる。Cf. Vann, *op. cit.*, pp. 67-70.
- (7) *Ibid.*, p.71.
- (8) *Ibid.*, p. 78.
- (9) Judith J. Hurwich and Richard T. Vann, 'Debate: The Social Origins of the Early Quakers' in *Past and Present*, No. 48, 1970, pp. 156-162.
- (10) 参考のために以下の諸教値をあげておく。一六七〇年におけるウォリックシア全体の一族あたりのかまど数平均値は一・八、一六六二年以前におけるウォリックシアのクエイカーのそれは二・一、一六六二年におけるウォリックシアのクエイカーのそれは一・九、一六六三―一六六九年のウォリックシアのクエイカーのそれは一・九。ウォリックシアのヨーマンの一族あたりのかまど数平均値は二・四、ハズバンドマンのそれは一・五、労働者のそれは一・三である。Cf., Hurwich and Vann, *op. cit.*, p. 160.
- (11) *Ibid.*, pp. 162-164.

- (12) Alan Anderson, 'The Social Origins of the Early Quakers' in *Quaker History*, Vol. 68, No. 1, 1979.
 - (13) sufferings accounts これは、十分の一税その他の支払いを拒否したためにクエイカーたちがこうむった財産没収その他の被害を記録したもので、これらの記録から逆に、クエイカーたちの財産価値額を推定することが可能になる。
 - (14) Anderson, *op. cit.*, p. 39.
 - (15) コウルの研究においては、ランカシアのクエイカー・ジェントリーはわずかに一名しか発見されていないが、これは彼が資料として結婚登録簿しか利用しなかったためである。
 - (16) Anderson, *op. cit.*, p. 39.
 - (17) Barry Reay, 'Early Quaker Activity and Reactions to it, 1652-1664' Oxford University Ph. D. thesis, 1979, Appendix 2. 以下同, 'The social origins of early Quakerism' in *Journal of Interdisciplinary History*, XI, 1980. 本稿では前者のページ数を示す。
 - (18) *Ibid.*, pp. 223, 228.
 - (19) 年収四〇ポンド以上の自由保有農。ヴァンはヨーマンというカテゴリーをこのように厳密な意味で理解した。
 - (20) この表の中で、〈Wholesale Traders と大規模生産者〉のカテゴリーに含まれるのは、Miller, Tanner, Maltsters, Cheese-factor, Clothier, Grocer, Saymaker, Baymaker, Saylor, Draper, Merchant, Merchant-tailor, Fuller, Mercer, Sergemaker であり、〈Retail Trader〉のカテゴリーに含まれるのは、Shoemaker, Glover, Tailor Chapman, Baker, Ironmonger, Shopkeeper, Chandler, Butcher, Goldsmith といった職業の人々である。
 - (21) 「表12」中のバックinghamシア、ノーファックおよびノリッジに関する数字はヴァンが調査した一六六二年までにクエイカーになった者のうち、職業が判明する者全体に対する各カテゴリーに属する者の数の百分比である。職業の判明する者の総数は、バックinghamシアで五五名、ノーファックで七四名、ノリッジで一六名である。Cf. R. T. Vann, *The Social Development of English Quakerism*, Cambridge, Mass., 1969, pp. 74-75.
 - (22) レイは特に次の二点に読者の注意を向けている (Reay, *op. cit.*, p. 231)。一つは、彼が調査した地域のクエイカーのヨーマンのほとんどが自由保有農ではなくて、定期借地農あるいは贍本保有農であったということ、つまり彼等のはほとんどが、庶民院選挙権は持つけれども被選挙権を持たない人々であったこと。もう一つは、クエイカーの Retail Traders や職人層の中でも織布工、靴製造人と仕立屋の比率が高いこと。つまり、これらの職業の人々は座ったままで仕事を行うのであり、仕事は軽労働であったので、かなりの教養を持った人々が多く、これらの職業と神祕主義的異端思想とは適合的な関係にある、と言われる。このような関連は多くの社会史家によって指摘されてきたが、邦語文献では例えば、阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社、一九八一年、八九―九〇頁を見よ。
- なお、レイはハーウィッチによって提唱された「かまど税」査定簿を利用して別個に当該時間のサマセット、エセックスおよびチェシアにおけるクエイカー家庭の富裕度を調査している。その結果、クエイカーの家庭の大多数が「中ぐらいの (middling sort)」富裕度を示しており、

〔表16〕 三州におけるクエイカーの各社会層の所有かまど数平均値

	Cheshire	Essex	Somerset
	74名	94名	50名
Gentry	3.2	8.0	不明
Professional	2.0	3.0	不明
Yeoman	2.0	4.0	3.2
Husbandman	1.2	1.5	1.3
Labourers	1.0	1.3	1.0
Wholesalers	2.5	5.0	3.2
Retailers	1.5	3.1	2.0
Artisans	1.3	2.6	2.5

〔出典〕 B. Reay, *op. cit.*, p. 232.

上記三州のクエイカー家庭全体のかまど数平均値が、全住民家庭のかまど数平均値を、約一かまど分上まわっていることが明らかにされる。この結果は彼の職業分析による社会層構成の検討の結果を補強するものとなっている (Reay, *op. cit.*, pp. 232-235)。ただし、社会層分析のために「かまど税」を利用する際には、一定の方法上の留保が必要だということは、記憶されるべきである。この点については、下記(注30)を見よ。

(23) 私は、かつてヴァンによる初期クエイカーの社会層構成の研究を紹介したことがあるのだが、そこでも、彼の調査方法には基本的に賛意を表しつつも、その結論をそのまま受け容れることを拒否し、その二つの理由を記しておいた(詳しくは、拙稿『一橋研究』一三三号、一四一―一四二頁、を見よ)。しかし、その究極的な理由は、興隆期クエイカー派の政治・社会思想と、その社会層構成の特徴との矛盾なのである。

(24) 興隆期クエイカーの政治・社会思想については、W. Schenk, *The Concern for Social Justice in the Puritan Revolution*, London, 1948, Chapter 7.; W. A. Cole, "The Quakers and Politics, 1652-1660," Cambridge University Ph. D. thesis, 1955.; do., "The Quakers and the English Revolution," in T. Aston ed., *Crisis in Europe, 1560-1660*, London, 1966.; 田村秀夫『イギリス革命思想史』一九六一年、創文社、第四章。Hugh Bartour, *The Quakers in Puritan England*, New Haven and London, 1964, Chapter 7; B. Reay, *op. cit.*, pp. 11-19 などを見よ。当該問題についての最良の研究書は、W. A. Cole の前掲未公開博士論文(前掲)である。

(25) ヴァンが想定する興隆期クエイカーの階層構成は、むしろ長老派や大聖位期のグランディーズの社会思想に適合的である。

(26) その一部は、N. Penny ed., *The First Publishers of Truth*, London, 1907. として公開されている。

(27) その一部は、J. Besse, *A Collection of the Sufferings of the People Called Quakers &c.* 2 vols. 1753. として公開されている。

(28) それらは未公開であるが、それらの大部分はロンドンの Friends House Library に所蔵されている。

(29) その一部分は、幾つかの史料集として公開されている。

(30) 「かまど税査定簿」を利用する際に注意すべき第一点は、例えばアンダーソンがランカシアについて指摘しているように、地域によってかなりの脱税が見られる、ということである。また第二には、同一社会層に属する人々のかまど、所有規模が、地域によって全然異なる、ということである。例えばB・レイは、三つの州のクエイカーの各社会層の平均かまど、所有数を〔表16〕のように算定している。したがって、「かまど税査定簿」は、一定地域の内、部だけで、クエイカー派信徒の富裕度を、その地域の全住民あるいは、その地

域の他宗派信徒の富裕度と比較するうえで有効なのであり、それ以外の有効性はない。

- (31) Wholesale Traders と Retail Traders のカテゴリーの内容については、簡単に、拙稿『経済貿易研究』第八号、七八頁、第七節の注(3)を、詳しくは、R.T. Vann, *op. cit.*, pp. 67-68. を見よ。

- (32) この時期の織布工については、さしあたり、大塚久雄『近代欧州経済史序説』一九八一年版、岩波書店、二七三―二七九頁を見よ。

- (33) 十六・十七世紀の地主の土地経営については、浜林正夫「イギリス絶対王政期の地主経営の諸類型」『一橋論叢』六四巻一号、一九七〇年、を参照せよ。浜林教授はこの論稿の中で、絶対王政期の多様な地主経営を五つの類型にまとめ、おそくとも十七世紀の末までに地主経営の多様性は単純化して、地代生活者型に収斂してくる、と述べておられる。

- (34) ブリストルにおける初期クエイカー派の社会層構成については、拙稿『経済貿易研究』第八号、一九八一年、七〇―七五頁を参照せよ。

- (35) Cf. R.T. Vann, *op. cit.*, pp. 73-78, A. Anderson, *op. cit.*, pp. 37-38. ただし、バッキングガムシアでは、十八世紀に入るとクエイカーのジェントリーの絶対数が減少している。しかし他方、ノーファークでは、十八世紀に入ってクエイカーのジェントリーの絶対数が増加している。

- (36) 王政復古期に教会組織を通して運用されたクエイカー派の互助制度と救貧制度については、拙稿『商経論叢』第十五巻一号、一九七九年、九八―一〇二頁、を参照せよ。

- (37) W. Beck and T.F. Ball, *London Friends Meetings*, London, 1869, p. 90. この表は、Arthur Raistrick, *Quakers in Science and Industry*, Newton Abbot (Devon) 1968. (ユニオン版) の pp. 30-31 にそのまま掲載されており、山下幸夫教授はレイストリックの著書に掲載されたこの表を『近代イギリスの経済思想』一九六八年、岩波書店の一三四―一三七頁に訳出して掲載しておられる。〔表13〕における職業名の訳語については、私は山下教授の訳語を参照したが、また、いくつかの修正をも加えた。

- (38) W. Beck and T.F. Ball, *op. cit.*, p. 90 と p. 91 のあいだにとじ込まれた表。この表には、一六五八年から一八六四年のおよそ二〇〇年間のロンドン・ミドルセックス季会管轄域内の結婚件数が、五年ごとにまとめて集計されている。この管轄域内の結婚数は、一六七五―一六七九年に二九五件という最高値を示し、その後は、若干の上下変動をくりかえしながらも漸減の傾向を示し、一八六〇―一八六四年には三九件の最低値にまで低減していく。

- (39) 例えば、匿名氏は次のように言う。「クエイカーたちが貧しく、ぼろを着て歩いていた時には、彼等は富をのしった。その理由は、彼等が何物をも持っていなかったからだ。だが……事態は変わった。そして今や彼等は世俗の富や虚飾と和解して、土地を購入して毛皮に身をついで、馬に乗り、クエイカー派に改宗していない人々と同じように飲食するようになった」と。(Anon., *Remarks upon the Quakers, wherein the Plain Dealers are plainly dealt with*, 1700 pp. 9, 10. cited in Braithwaite, *The Second Period of Quakerism*, 1919. Second Edition, London, 1961, p. 499. また、十九世紀の二〇年代に別の匿名氏は「富の蓄積への没頭が、キリスト教徒の民としてのキリスト友会に与える影響の考察に捧げられた部分、あるいは章を見つけないとして、私は……その著作 U.J. Gunney, *Observations on the Religious Peculiarities*

of the Society of Friends, London, 1824. をぞす」のほとんどすべてのページをひっくり返してみたが、富の蓄積への没頭は、富のあり余る当世においては、キリスト友会の個々のメンバーのあまりに多くの人々の感情と行動に大いに入りこんでいることは明らかだ。しかしながら、そのような章はどこにも見あたらなかった」として、J・J・ガーニーを批判している。(Anon, *An Appeal on the subject of the Accumulation of Wealth, addressed to the Society of Friends, usually called Quakers*. London, 1824. pp. 6-7. しかしながら、この事実を証明するもっとも有力な証言は、他でもない、ロンドン年会から各地のクエイカー派の教会業務集会に対して送られた、信徒の経済生活に関する忠告の手紙である。私はかつて *A Selection from the Christian Advice issued by the Yearly Meeting of the Society of Friends held in London*, second edition, London, 1813 に収録された信徒の経済生活に関する忠告の手紙を紹介し、分析したことがあるのだが(拙稿『商経論叢』第十五巻二号、一九七九年、一〇二一―一〇九頁)、「これらの書簡を全体として概観してみると、忠告の力点は明らかに移動しており、その変化は一七三二年の書簡にはじまる。この書簡では、当時の友会徒たちの過度の富の追求が先輩たちの模範に反するということが力説されている。次に一七五〇年の書簡では、前にも指摘したように、友会徒の多くが富裕になり、慈善を実践することが出来る立場に置かれた、と明言されている。そして十八・十九世紀交の時期の幾つかの書簡では、営利追求と信仰とが相対立するものとして考えられるようになり、富の追求を断念すべきことが説かれ、他方では恵まれない人々に対する慈善の実践がますます強調されるようになるのである(同上、一〇九頁)。

(40) ついでながら、「表13」を御自分の著書に訳出された山下幸夫教授は、この表の解釈の仕方を選んでおられる。すなわち教授は、次のように指摘される。「右の表の検討によって明らかなのは、彼等クエイカーの従事する多種多様な職業のうち、とくに社会の下層に位する職人、労働者、小商人などの占める比重の大きいことであり、このことは、一八世紀末葉よりも一世紀前の一七世紀へと時代、適るにつれて、その傾向が目立っているといえる」と(山下幸夫『前掲書』一三七頁。傍点は引用者)。ここで指摘されている論点は二つである、第一に、教授によれば、初期クエイカーの社会層は一般的に下層であった。教授は先の文章につづいて、さらに次のように言われる。「一般的にいつて彼等の多くのものが、少なくともその初期においては比較的貧しい職業に従事して、その営む営業の規模もまた小規模であったという点の一つの特徴として指摘されるであろう。」「こうしたクエイカーの基盤が社会的階層の上層ではなく、主として下層のうちに見出され、その間に広く浸透しつつあったという事実は重要(いずれも同上書、一三七頁)だと。しかしながら、あるグループの社会層的な特徴は、R・T・ヴァンが鋭く指摘したように、全人口の社会層構成や他のグループの社会層構成との相対的比較をおこなったのちにはじめて明らかにされるものである。それでは、一六八〇年頃のロンドンのクエイカーの社会層は、全人口の社会層構成との比較とのうえで、どのような特徴を持っているのだろうか。幸いにして我々は、一六八八年におけるイギリスの国民所得に関する、周知のグレゴリー・キングの統計表(浜林・篠塚・鈴木編訳『原典イギリス経済史・増補版』御茶の水書房、一九七二年、二三九―二四〇頁)を持っている。私はこの表に記された世帯数をB・レイのカテゴリにまとめなおして集計して「表17」を得る。この「表17」と「表13」を比較して気がつくことは、ロンドンのクエイカー派の中では(労働者・水夫・兵士)の比率が大変少ないことである(二五〇名のうち一八名、すなわち七・二%。キングの表では三三・三

〔表17〕 1688年のイングランドの社会層構成

社 会 層	世 帯 数	%
貴族 (準男爵・騎士を含む)	1,586	0.1
ジェントリー (エスクァイアを含む)	15,000	1.1
専門職(a)	55,000	3.9
農業関係	730,000	—
フリー・ホルダー (ヨーマン)	180,000	12.8
借地農 (ファーマー)	150,000	10.6
小屋住農・貧民 (ハズバンドマン)	400,000	28.4
海外・国内商人	10,000	0.7
小売商, 商店主	40,000	2.8
手工業者, 職人	60,000	4.3
労働者, 水夫, 兵士	469,000	33.3
浮浪者	30,000	2.1
計(b)	1,410,586	100.1

- (注) (a) 上級・下級官吏, 法律家, 僧職者, 学者, 自由業者, 陸軍・海軍士官。
 (b) グレゴリー・キングは世帯数合計の加算をまちがえて 1,360,586 としている。

の中産の人々の比重が、全人口の社会層構成との比較の上で、大きいことなのである。

山下教授の解釈を構成している第二点は、クエイカーの社会層の中で社会の下層に位置する人々の比重が「十八世紀末葉よりも一世紀前の十七世紀へと時代の遡るにつれて」大きくなる、という論点である。しかしながら、「表13」をそのように解釈することは出来ない。なぜなら「表13」では、ロンドンにおける一六八〇年ごろのクエイカー派の社会層構成と一七八〇年ごろのそれとの二つのデータが示されるのみであって、「時代を遡るにつれて」現われてくる変化の流れを示していないからである。

以上のように山下教授の解釈は、「表13」からは読みとることの出来ないはずの二論点を、恣意的に読むことによって成立している。では山下教授は何故このような誤りを犯されたのか。それは教授が前掲(注37)で引用したレイストリックの著書における論述を、みずから検討を加えられることなく、安易に信用されたからである。そして、レイストリックの当該箇所(A. Raistrick, *op. cit.*, pp. 27-32)における趣旨は、ベルンシュタインにはじまる通説を、様々の断片的史料によって支持することにあつた。しかも、それは、よく検討してみればわかる

%)、つまり、ロンドンのクエイカー派においては社会の最下層の人々の比率はきわめて少ない。むしろ、ロンドンのクエイカー派の中で多いのは、Wholesale Trader, Retail Trader および「手工業者・職人」といった中位の諸社会層である。その中でも、海外・国内商人を含む Wholesale Traders の比率はロンドンのクエイカーにおいては九・二% (これは、貿易商人、醸造業者、醸留業者、ブドウ酒商、ブドウ酒卸商、酒屋店主、タバコ商、タバコ刻み人の総計一九名) であり、これはG・キングの「表17」中の「海外・国内商人」の〇・七%の一〇倍以上である。このように、一六八〇年ごろにおけるロンドンのクエイカー派の社会層構成の特徴は、山下教授の言われるように「社会の下層に位置する職人、労働者、小商人などの占める比重の大きいこと」ではなくて、むしろ「海外・国内商人、小売商、商店主、手工業者、職人など

ように、けっして成功していないのである。「私の意図は、ベルンシュタイン・レイストリッカー・コウルの通説ライン（誤った轍）に対する批判なのであって、山下教授に対する個人批判なのではない。念のために書き添えておく」。

(41) E. Isichei, *Victorian Quakers*, London, 1970, p. 178.

(42) これらの莫大な史料も、ロンドンのフレンズ・ハウス図書館に所蔵されている。

(43) Charlotte Erickson, *British Industrialists: Steel and Hosiery*, London, 1959, pp. 230-232. 本書は青山学院大学図書館所蔵の図書で、私はこれを今野国雄教授の御好意で参照することが出来た。特記して謝意を表します。

(44) 企業家の場合には、五名以上の労働者を雇用するものが第一社会層に含まれ、四名以下の労働者を雇用する企業家は第二社会層に含まれる。十九世紀イギリスにおける上流階級と中流階級の意味については、村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ、一九八〇年、第二部「ヴィクトリア社会の位相」を参照されたい。ただし、村岡氏は「中小商工業者、職人、商店主など」を中流階級に含めておられる（同上、一二六頁、図1）が、私はそれらを除外したほうが適切であると考ええる。というのは、氏自身正しくもこれらの人々を「下層中流階級」と形容しておられる（同上書、一五七頁）からであり、また氏がB・デイズレーリによる「二つの国民」という形容を引用される場合（同上書、一五七頁、注1）、これらの「下層中流階級」の人々はむしろ労働者階級の上層を含むグループに分類すべきだ、と思えるからである。

(45) *British Parliamentary Papers, 1851 Census Great Britain: Ages, Civil Condition, Occupations and Birthplaces*, Vol. 1., Shannon, Ireland, n.d. 職業統計についてのまとめは、pp. lxxxii-c. に記されている。

(46) Ch. Cook and J. Stevenson, *Longman Atlas of Modern British History*, London, 1978, p. 145. 所収の図を利用した。

(47) ダッドリー・バクスターの国民所得統計そのものを、私は入手・参照することが出来なかった。そこでここでは、E.J. Hobsbawm, *Industry and Empire* (Penguin Books 版) pp. 154-157 および Diagram 10 を参照した。なお、G.D.H. Cole, *Studies in Class Structure*, London, 1955, pp. 55-57, 彼は労働者の階層構成についてのバクスターのとりえ方に異議をとなえてこれを算定しなおして、一八六七年における労働者階級全体の中で熟練労働者が占める割合を一四・四％、半熟練労働者が占める割合を三三・三％、不熟練労働者が占める割合を五二・三％としている。

(48) Cf., E.J. Hobsbawm, *op. cit.*, Diagrams 9-12, G.D.H. Cole, *op. cit.*, pp. 57-59.

(49) Paul H. Emden, *Quakers in Commerce: a record of business achievement*, London, 1940; Arthur Raistrick, *Quakers in Science and Industry: being an Account of the Quakers contributions to science and industry during the 17th and 18th centuries*, London, 1950.

(50) ただし我々は、一八四〇—四一年、七〇—七一年、一九〇〇—一〇年の三時点のいずれにおいても、約七％のクエイカーが第四社会層に属していたことを忘れてはならない。彼等は生活に追われ、教会業務集会に出席することはほとんど無く、教団の内部でほとんど常に忘れられた存在であった、とイシチェイは述べている(Cf., E. Isichei, *op. cit.*, p. 173)。

(51) M・ヴェーバー『宗教社会論集』河出書房、世界の大思想Ⅱの7。英明訳、二一九頁。

(52) クエイカー派の職業倫理については、拙稿『商経論叢』第十四卷三・四号、および第十九卷一号を参照せよ。

(53) 一例をあげよう。フォザギル等の努力で一七七九年にヨークシアに創立されたアクワ・スクールは、中産下層および下層階級のクエイカーの青年を教育するための機関であったが、その卒業生のかなりの部分、特に農村出身の卒業生の多くは、アメリカに移住したようである。
(Cf. John S. Rowntree, *op. cit.*, p. 102.)

(1984.7.1)

(未完)

〔附記〕 本稿脱稿後、浜林正夫「イギリス労働者階級の成立」林基監修『近現代社会における階級闘争』青木、一九八〇年、所

収、を読む機会を与えられた。浜林教授は本稿の中で、私とは異なった観点からではあるが、一八三一年のセンサスと、

カフーンの『貧乏論』(一八〇六年)の中の国民所得推計表を検討しておられる。併せて参照されたい。